

群馬県における弥生時代中期の社会形成について

大木 紳一郎

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 1. 弥生時代中期の土器編年
- 2. 遺跡分布による地域別動向

- 3. まとめ

— 要 旨 —

群馬県における弥生時代中期後葉は、長野県からの栗林式土器群を伴う集団の移動、あるいはその強い影響力を受け、それ以前の弥生社会が大きく変化を遂げた時代とされる。水田稲作に軸足を置いた定住型集落の分布、再葬墓制からの脱却、栗林式土器への全面的転換が、このことを語る象徴的現象である。大局的に見れば、この時期を境にして弥生社会の拡大が始まり、やがて弥生時代後期における安定した地域社会形成につながっていく。このような理解から、その端緒となった弥生時代中期後葉における集落の成立や地域内での動向を明らかにすることは、当地における弥生社会形成にどのような要因が関与し、いかなる条件のもとで弥生人たちの選択がなされたのかを読み解く基礎的作業と考える。本論では、近年に明らかとなった新資料を活用することで、従来までの理解を再検討し、あらためて弥生社会成立への具体的な道程を活写してみたい。

キーワード

対象時代 弥生時代中期
対象地域 群馬県
研究対象 弥生社会の形成

1. 弥生時代中期の土器編年

(1) 栗林式系土器編年の歩み

本論の主旨である群馬県の弥生社会形成過程を検討するにあたり、まずは時系列に従った遺跡の位置づけを図る必要がある。ここでは、集落であることが明らかな遺跡を主対象に取り上げる必要上、それが認定可能な中期後葉から後期初頭にかけての時期に焦点を当てることになる。幸いなことに、近年の発掘調査成果によって、この時期における内容の充実した新資料が加わり、従来までの土器編年観をより具体化することが可能になった。また、当該時期の土器編年観を理解するにあたって欠かせないのは、長野県における栗林式土器編年の研究動向である。これについては、石川編年(石川2002、2012)や馬場編年(馬場2008)等の研究成果が参考になる。土器型式の見直しや細分化の研究が進めば、より詳細で確度の高い土器編年が提示されると期待するが、本稿では群馬県における栗林式系土器群の位置づけを行うための対比資料として参考にしたい。

群馬県における弥生中期後葉の土器群については、「竜見町式」の型式名称で扱われることが長く続いている。その標式となった弥生土器は、高崎市に存する竜見町遺跡から出土したと伝えられる。昭和の初めころにはすでに弥生遺跡として知られていたよう、昭和9・10年頃に森本六爾や後藤守一が調査に訪れている^(註1)。杉原莊介・乙益重隆は、竜見町出土土器について「古式弥生式土器」と「櫛目式土器」の中間に位置付け、信州の栗林式と同系統と考えた(杉原・乙益1939)。なお、この紹介論文で「竜見町式」の名称は使われていないものの、型式認定と読み取れる説明はなされている。また山内清男によれば、杉原が「竜見町式なる一型式を指摘」(山内1940)しているとの表現があり、学界では当初から新たな土器型式として認識される流れにあったことは確かだろう。ただし、同一系統との評価を下しつつ、栗林式と異なる型式名が付与されたことが、後の批判(飯塚1984、設楽1986、若狭1996など)を招くことになる。筆者も、広域に分布する栗林式系土器群の中で群馬県独自の地域性が抽出される可能性を想定して「竜見町式」の名称使用にこだわったことがある。しかしその後に多くの新資料が加わっても、型式内容は栗林式と同一であることを追証するものばかりであり、異型式名で呼称することがかえって誤解を招くと考え、近年では「栗林式系土器」の名称を使っている。本稿でもこの名称で記載することとし、引用等のやむ得ない場合に限って「竜見町式」の名称を用いることとする。

さて、竜見町遺跡出土土器(以下「竜見町例」と略記する)の編年上の位置づけについては、評者による考え方にはレガがあり、確定的になったのは近年になってからである。杉原は當初中期に位置づけたが、のちに後期に引

き下げる考え方へ傾くようになる。おそらく、東日本への「櫛目文(櫛描文)」の普及をもって後期とする考え方(杉原1964)での見直しだったと思われる。竜見町例の壺を後期に位置づける考え方には、薗田芳雄(園田1969)や神沢勇一(神沢1966)も従っており、広域の編年を総括した比田井克仁は清里・庚申塚例を代表として後期前葉に位置づけた(比田井2002)。これに対して、長野県後期初頭の吉田式に樽式古段階が並行するとの認識から、群馬県内の研究者間では中期後葉におく考え方が定着している(山本1975、井上・柿沼1977、平野1986、相京1988、佐藤1988、若狭1996など)。群馬県における栗林式系土器群の時間幅のワク組みをどこまで引き下げるかにもよるが、少なくとも竜見町例はその中の最新段階とはいえない、この壺1点を掲げて後期に位置づけるには無理がある。竜見町遺跡の東側に位置する環濠集落で、該期にはほぼ限定される多量の土器を出土した高崎競馬場遺跡での検討では、竜見町例に後続する型式から樽式古段階に継続していく過渡的な段階の土器群であることが明確になった(大木2021)。同時期例としては、清里・庚申塚遺跡や浜尻遺跡での一括資料が知られており、従来はこれらを「竜見町式」の代表と指定することで、栗林式の新しい段階、あるいは百瀬式に併行するといった編年上の位置づけがなされる傾向がみられた。この点については、栗林式古相段階に匹敵する資料が確認されても、ほとんどが明確な遺構に伴わない断片的資料のため、やむを得ないことであったかもしれない。それでも、このような資料的制約の中で、栗林式の古～新段階に相当する資料を丹念に拾い上げて位置づけを試みた井上・柿沼(1977)や若狭(1996)による編年細分の提示は、改めて評価されるべきと考える。

近年、安中市の二軒在家原田頭遺跡において栗林1式(石川編年2012参照)のまとまった資料が発見されたことは、群馬県における栗林式系土器の編年研究に新たな刺激を与えることになった。栗林1式期に属する集落遺跡が確認されたことで、群馬県に早くから栗林式土器を使用する集団(以下「栗林集団」と略記)の進出が推測され、この後に続く栗林2式併行期の集落遺跡の存否、そしてそれらの動向を探ることが新たな検討対象に加わってきたのである。そのため、従来から知られている古相の栗林式系土器資料についても、改めてその位置付けの見直しを図る必要が生じてきている。さらに付言するならば、資料の充実していた新しい段階の土器群をもって「竜見町式」の代表と見られるがちな偏った編年観に対して、中期後葉を通貫する一定時間幅のなかで群馬県の栗林式系土器群を新たに位置づけていく編年の再提示が可能になったともいえる。この二軒在家原田頭遺跡資料を組み込んだ新たな編年試案は、すでに馬場伸一郎によって提示されている(馬場2018)。そこでは、自身の栗林式編年

(2008)との対比に基づき、群馬県内資料について編年上の位置づけが試みられた。二軒在家原田頭の資料について、栗林1式から一部2式古段階に下ると位置づけ、栗林2式に併行する資料についても限られた資料の中から抽出している。さらに、「竜見町式」編年研究の結節点となった平野編年(平野1986)の再評価と、かつて後期への過渡的型式として設定された「浜尻式」(山本1975)の再認定を行っている。現時点における群馬県内の栗林式系土器編年として、馬場の編年案は順当なものと評価できるが、群馬県資料を時間軸で並べた際の独自区分はなされていない。特に栗林2式における古・中・新段階の三細分に匹敵する区分根拠をもつ資料の乏しいことがその理由と思われる。そのため結果的には、群馬県内資料の編年的位置づけを栗林編年の区分名称で呼ぶことになった。このことについて、筆者としてはできるならば地域性を想定した群馬県内資料だけの独自編年案作成が望ましいと考えていたところである。そこに、近年の発掘調査で出土した良好な資料群が公表される機会を得たので、これらの位置づけとともに改めて従来編年案の見直しを試みることとした。

(2)群馬県内の栗林式系土器の編年案

ここで土器編年の見直しと細分案を試みるにあたっては、本稿の主旨でもある集落動向を把握するための時系列配置を目的とするので、各時期の時間的推移を示す特徴に焦点を当てた記述・図示となっている。

なお編年にあたっては、壺・甕の2形式を対象として、各々の器形と文様構成の時系列変化に主眼を置いた。対比する栗林式土器の変遷観については、石川編年(2012)と馬場編年(2008)に準拠し、群馬県内資料の位置づけについては馬場の群馬県編年(馬場2018)との対比を試みるつもりである。なお、文様構成の記述にあたっては、栗林式編年との対比で認識の共通化を図るために石川日出志が提案した表記法(石川2002)に従っている。

本稿の編年案では、群馬県出土の栗林式系土器を大きく1～3期に三分し、さらに2期を三細分、3期を二細分した。以下に各時期の特徴について述べる。編年図の第1図壺・2図甕では、石川編年(2012)の時期区分と併行関係を考える本稿の時期区分を縦列で記した。さらに、第2図甕では、横列で文様系統の波状文系列・羽状文系列・沈線文系列・縄文系列に分けて土器図を掲載した。第1・2図では器形対比を意図しており、同一器種ではほぼ同じ大きさの図示とした。このため縮尺は不同となっているので、注意されたい。

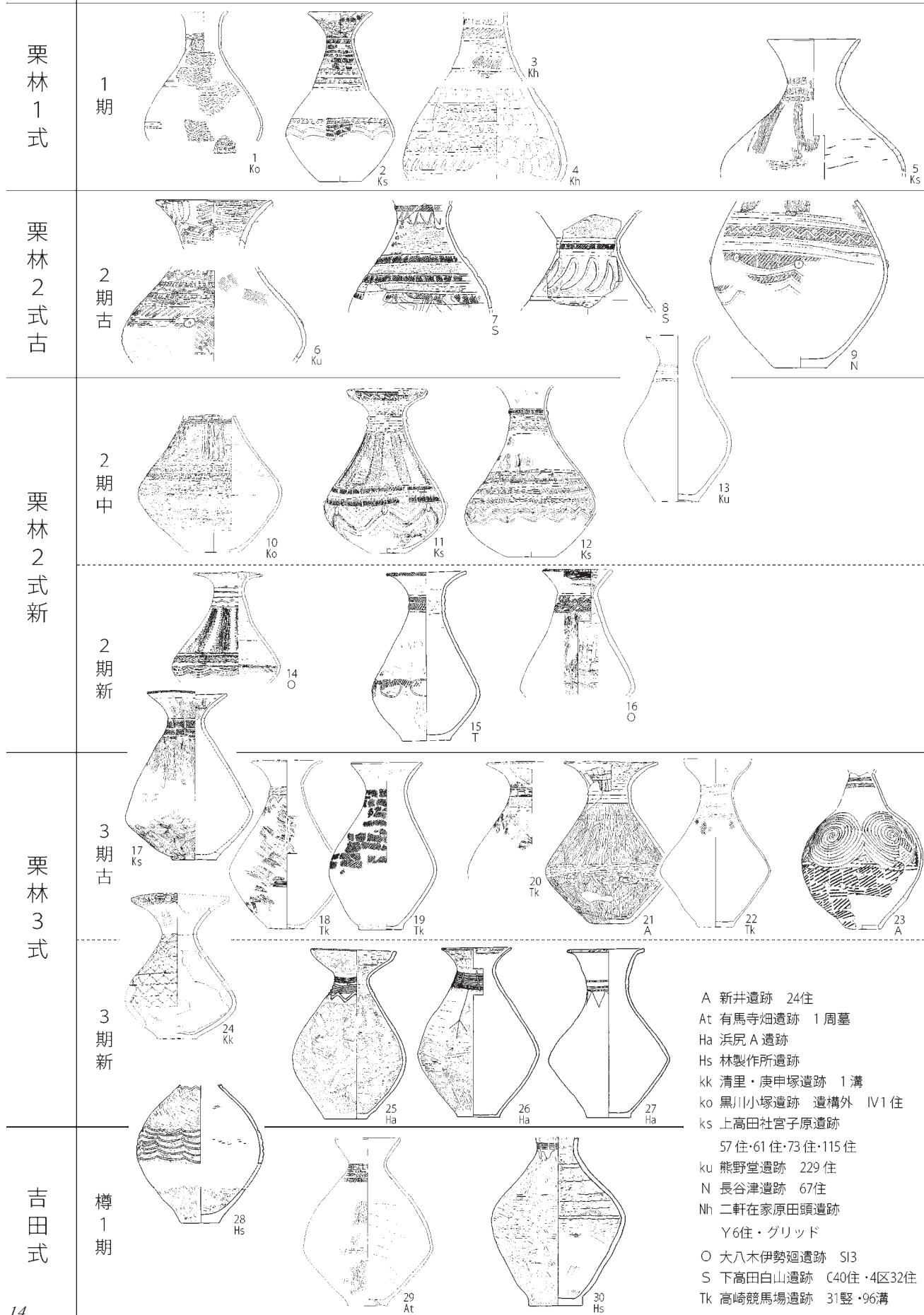
1期

二軒在家原田頭遺跡の資料が代表例である。二軒在家原田頭遺跡は、後述する碓氷川上流域と鏑川支流である

高田川に挟まれた横野台地西側に位置する遺跡である。16棟の竪穴建物が検出されており、2か所で同時存在があり得ない重複・近接関係が見られるので、2～3世代程度の時間幅が見込まれる。出土土器の特徴や型式の認定については、すでに馬場による詳細な検討(馬場2018)がなされているので、ここでは繰り返さない。馬場の検討結果についてまとめるならば、栗林1式を主体とし一部は2式古段階に下る時期に位置づけられ、在来系の長根安坪式(石川2003)が伴うこと、さらに石川県の八日市地方8期(福海2003)ころに位置づけられる小松式の影響を受けていることが注目すべき特徴とする。在来系の長根安坪式は、中期中葉前半の神保富士塚式の内容を引き継ぐ後続型式であるが、良好な資料に恵まれないため、器形や文様構成がどのように変化したかを十分に把握できていない。それでも、前型式から継承された長頸壺における文様に関して、粗雑な施描や文様区画への刺突多用、筒形土器・鉢など小型器種文様への複数細沈線による施文、甕を主とした櫛描文の比重増、磨消し縄文の退化、壺体部下半の条痕消失といった特徴から、中期中葉の後半以降に位置づけられる。長根安坪式の後継型式が不明瞭であることが課題として残されているものの、ここでは馬場の考えに従い、栗林1式から2式古段階に併行する在来系土器として認識しておく。

壺 長頸で胴中位が最大径となる器形に、交互に重畠する単帶多段構成の[2+4]装飾帶構成(石川2002)をもつ。第1図1・3・4は栗林1式に属するが、同図2は[2+4]装飾帶に櫛描文が見られず、刺突と篦刻み列だけで構成され、胴部の下弦連弧文は嶺田・阿島式からの系統に連なる文様構図ともいえ、栗林1式とするには躊躇する。なお、馬場によれば、二軒在家原田頭Y14号住出土の壺に栗林2式古段階に下る例を指摘する。これについて筆者は判断する根拠を持たないため、保留したい。同図5は上高田社宮子原61号住で同図2と共に伴った北原式の壺である。頸部の簾状文や上下に展開する肩部櫛描文から北原式の2段階(山下1999)に近いと思われるが、栗林1式よりは時期が下る可能性が高い。ここでは参考資料にとどめておきたい。

甕 頸部くびれの弱い円筒に近い体部上半形状をもち、口縁直下から体部上半にかけて櫛描羽状文、櫛描波状文を描く。体部最大幅部に刺突列点をめぐらすものが主体である。ところで、馬場が栗林2式古段階とした二軒在家原田頭遺跡Y14号住出土の櫛描波状文甕(第2図1)を、ここでは1期の甕として位置づけた。口縁直下から体部上半にかけて直線的に下がり、中位で強く屈曲して底部に向け直線的にすぼまる形状は、中期中葉の甕に共通する古相形態である。横位の櫛描波状文を重ねて櫛描直線をスリット状に垂下する文様構成が、栗林2式で多く見られるのは確かだが、本例は頸部を無文とし、直線



第1図

| 北信 | 群馬 | 波状文系列 | 羽状文系列 | 沈線文系列 | 縄文系列 |
|-------|-----|-------|-------|-------|--|
| 栗林1式 | 1期 | | | | A 新井遺跡 24住 Ar 有笠山遺跡 At 有馬寺畠遺跡 Hb 東八木遺跡 2住 Kk 清里・庚申塚遺跡 7溝・10住・11住・18住・21住 Ko 黒川小塚遺跡 21坑・IV2住 ks 上高田社宮子原遺跡 73住・115住 kss 金井下新田遺跡 17堅・21堅・25堅 N 長谷津遺跡 67住 Nh 二軒在家原田頭遺跡 Y6住・Y14住・Y16住 S 下高田白山遺跡 4区32住 Tk 高崎競馬場遺跡 1群・46堅・50堅・38井・70坑 |
| 栗林2式古 | 2期古 | | | | |
| 栗林2式新 | 2期中 | | | | |
| | 2期新 | | | | |
| | 3期古 | | | | |
| 栗林3式 | 3期新 | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 吉田式 | 樽1期 | | | | |
| | | | | | |

第2図

垂下文(4帯)は幅広く、体屈曲部にめぐらした刺突列点文で施文範囲下限を明確にする文様構成は栗林1式に相当と考える。また、以下で述べる2期段階の甕との対比で古相と判断したことも理由になる。なお、第2図2の甕は、馬場が栗林式文様を取り込んだ在地系甕としたものである。器形は在来系甕の特徴を色濃く残すが、体部上半を充填する縦位羽状文の下端を刺突列点文で限っており、第2図1と同一の施文意識を看取できよう。

二軒在家原田頭遺跡以外で、1期に比定可能な例として図示した黒川小塚包含層(第1図1)、上高田社宮子原61号住のほかに、金井東裏8号住および遺構外出土土器(渋川市)、下高瀬上之原32号土坑(富岡市)、中高瀬觀音山市教委調査24号住(富岡市)出土例を挙げておく。

1期は栗林式の石川編年1式に概ね併行すると考える。資料が限られているため、馬場編年(馬場2008)で提唱された1式の古・新段階に対応する細分は難しい。

2期

1期に比べて新たな文様構成が加わり、壺の3装飾帯における懸垂舌状文に表徴されるような類型化された文様の定型化が見られる。1期から3期に至る変遷過程から三段階に細分した。

壺 胴部の最大径が下位に下がる形状で、[2・3・4・5]、[2・0・4・5]装飾帯構成が主体となる。また、共伴例を見る限り、頸部文様だけの素文系壺(第1図13)も少なからず伴う。

2期古段階は1期からの器形や横帶多段構成を残しつつ、[2・3・4・5]、[2・0・4・5]装飾帯構成に移行したものである。第1図7・8は富岡市下高田白山遺跡(群埋文2022a)の新出例で、頸部の縄文を充填した突帯や太い籠描き沈線が共通の特徴である。8は3装飾帯に斜傾する振幅の大きい波状文を描き、4装飾帯には沈線区画の櫛描直線文を充填する。この波状文は長野市荒山出土の壺(八幡1932)と同様で、縄文を地文としない点が新しい要素といえる。同図9の長谷津67号住例は、5装飾帯の重連弧文が縄文と無文帯の交互重畳である点に新しい要素を見るが、1期に通有であった中位が張る胴部形状から2期でも古段階に位置づけた。

2期中段階は、胴部最大径が低い位置に下がり典型的な下膨れ形状となる。文様を描く籠描き沈線が細く、3装飾帯への懸垂舌状文が定着する。4・5装飾帯では横帶構成を継承するが、縄文が退潮し、沈線のみで表現される部分が増える。なお、[2・0・0・0]装飾帯構成の素文壺(第1図13)は、1期以来の細頸で胴中位が球形に張る形状を保っており、同図6と共に2期古段階に遡りうる例である。

2期新段階は、口縁が強く外反し、2期古・新段階よりもやや伸長する。縄文は口唇部と頸部以外ではほとんど

施文されない。竜見町例(第1図15)は器形と頸部縄文帯の特徴からこの段階に位置づけ得るが、体部への籠描き橢円形文と地縄文は栗林式系土器群の中では異例といるべきである^(註2)。図示していないが熊野堂194住でも胴部中位にのみ縄文を施した壺が見られる。

甕 2期古段階では、頸部屈曲の弓なり形状が明瞭で、体部中位がやや張り出す。1期の形状を継承して体部下半～底部は直線的にすぼまるものが主である。強く屈曲する受口形状の口縁(第2図5)が見られるようになる。文様は1期甕を継承するが、頸部に櫛描直線文か波状文をめぐらす例が加わる。体部文様は櫛描による羽状文と波状文で、下限を画さず体部下半まで施文する。

2期中段階は、頸部が「く」字状に屈曲するものが多くなり、体部下半の高さが減少するため、体部中位が丸みを帯びて膨らむ形状になる。受口口縁は屈曲度合いの弱いものが多い。文様は、頸部に櫛描文をめぐらすものが主体で、その中に簾状文が加わる。体部文様は2期古段階を継承するが、スリット状の櫛描垂下文は短帯で間隔もまばらになる(第2図6)。8の櫛描斜格子文、9のコの字重ね文は、群馬県域での出現段階のものである。10のコの字重ね文甕は、内彎気味の口縁形状と地文縄文が見られないことから2期中段階でも新相である。なお、第2図7黒川小塚例で見られるように、体部中位の刺突列点文は少数例としてここまで残るが、櫛描羽状文範囲が体部下半まで延びているため、1期段階と異なり横位羽状文の中軸を飾る構成に変化している。

2期新段階は、中段階の器形に体部上位が張り出す形状(第2図13・15)が加わる。体部文様は中段階と同じ構成ながら、間隔がまばらで、横位・縦位ともに施文軸のぶれたものが多い(第2図11・13)。なお、14は体部上位に櫛描波状文、下位に櫛描羽状文を共存させる類型では最も早い例である。これは文様構成の後出性から2期新としたが、器形の特徴は古相を示し2期中段階に置くべきかもしれない。第2図16は器面全体に縄文を施す稀少例である。

以上、2期を古・中・新の3段階に細分したが、中段階と新段階は変化が漸移的で、明瞭な区分基準の検討を続ける必要がある。

2期古段階は栗林2式古、2期中段階と新段階は栗林2式新とほぼ並行すると思われる。

3期

群馬県内で早くから資料が充実していた土器群にあたり、「竜見町式」の代表として扱われることも多かった。2期までの文様が簡素化、あるいは省略される過程を明瞭に示す。後期の樽式に至る過程から二段階に細分した。

壺 古段階では、口縁から胴部中位に至るシルエットが一連の弓なり彎曲で、胴部最大径部が「算盤玉」形に張り

出す形状が多い。外反する口縁の伸長化と、凸帯でなく平坦化した頸部文様がこの形状に影響している。[2・0・0・0]装飾帯が大部分で、[2+4] [2・3・4・0] [2・0・4・5]装飾帯は簡素化された形で少数見られるだけになる。頸部への縄文地文を残すが、装飾効果のうすい粗雑な施文になる。頸部文様は細い籠描き沈線による横線文、波状文、山形文を複数段めぐらす例が主流である。また、頸部下の2a装飾帯の定着、櫛描簾状文(第1図20)や鋸歯文(同図18)の初見がこの段階の特徴である。この段階の櫛描簾状文や鋸歯文は、籠描き沈線で区画しており、後期初頭段階での同一文様とは施描法に一線を画す。第1図17は、胴部最大径位置が下位にある古相形状ながら、肩部にやや膨らみを見せる新相要素も備える。第1図19は頸部から胴部上半にかけての広範囲に縄文のみを施文した例で、赤城山南麓地域に分布する北三木堂式(大木2018)である。この段階で確実に伴う例として掲げた。なお、3期古段階の新出例として、東吾妻町新井遺跡24号竪穴例(群埋文2022b)を図示した(第1図21・23、第2図17・21)。焼失家屋とみられる同竪穴建物からは遺存状態良好で器種豊富な土器群が一括出土しており、その中で東北地方南部の陣馬式^(註3)とみられる沈線渦文系の壺(23)が伴っている。両地域間の並行関係を示す確実な例として特筆されよう。

3期新段階は、口縁の伸長が進むとともに受口は内彎形状(第1図24・25)となる。胴部形状は、上半がやや膨らみ、最大径の位置が中位付近まで高くなる。この器形的特徴のため、2期の典型であった細頸で下膨れの器形が消滅する。文様では地文縄文の消失、頸部文様への櫛描文定着があげられる。24は清里・庚申塚1号溝例で、細沈線による横線と山形文を交互施文する[2+4]装飾帯構成の最終形であり、同遺跡ではこれに形骸化した5装飾帯を伴う例も見られる。図示していないが、高崎競馬場遺跡73号土坑からは、胴類型で5装飾帯に重山形文を連ねた3期古段階に位置づけ得る例がある。第1図24は大きく開く口縁形態から3期新段階としたが、胴部形状の特徴や高崎競馬場例との類似から、浜尻A遺跡の25～27より古く位置づけることは可能だろう。口径の大きい器形は小型壺ゆえとも考えられ、新旧判断に注意を要する。なお、3期新段階とした浜尻A遺跡例は、山本良知によって「浜尻式」と設定(山本1975)、さらに馬場伸一郎によって追認(馬場2018)された。栗林式有文壺の伝統的文様構成から脱却した点で栗林式と切り離し、後出する樽式1期にみる櫛描文による文様構成の定着が見られないことから、それとの過渡期として位置づけたことになる。時系列上の位置づけは了解できるのだが、個別型式名を与えることには躊躇してしまう。浜尻Aの一括出土壺群と同類型の例は、清里・庚申塚遺跡や高崎競馬場遺跡でも少なからず認められ、各集落存続期間の最後を

飾る土器群と理解している。つまり、弥生時代当時の集落構成員にとってみれば、土器製作の際に新たな要素を加えながら次第に変化させていった連続性の結果なのであって、強力な外的影響などによる画然とした変革要素が認められない限り、現在私たちが「型式差」として線引きを迫るほどの革新性はないと考える。実は、樽式1期への変化についても同様のことが言えるのであって、栗林式から樽式への土器型式の流れに、技術史や文化史等に反映できるような画期は見られないといってよい。敢えて挙げるならば、据え置く大型壺の出現であり、鋭利な施文具から想定される金属製工具の普及だろうか。「浜尻式」設定の意義は、弥生中期と後期を結ぶ過渡期としての位置づけを強調することにあると理解しているが、筆者としてはむしろ「連続性」をこそ強調したい考えであり、土器型式にあたかも大きな変革があったかのような誤解を避けるために、現時点で個別型式名を付すのは賛成できない。したがって、本稿ではこれらを栗林式系土器の最終段階となる3期新としたわけである。

甕 3期甕の特徴は、頸部文様が簾状文にほぼ統一されることにある。器形は、頸部に近い体部上位が張出し、体部下半もやや丸みを帯びる形状が主流となる。また受口形態は内彎形状となる。後続する樽式への変遷過程から、口縁の伸長が想定されるところだが、3期段階の甕ではまだ明瞭ではない。頸部の簾状文は2期中段階からすでに出現しているので、それらとの相違は、器形の特徴と体部櫛描文の乱れの程度ということになり、明確な識別は難しい。体部文様は櫛描の波状文と縦位羽状文を主とするが、櫛描斜行文(第2図19)や「片流れ」と表現すべき水平線と斜線の組み合わせがみられるようになる。これらは縦位櫛描羽状文の変容と捉えてよい。また第2図20は、体部上半に櫛描波状文、下半に縦位羽状文で描き分けた類型で、2期新段階(第2図14)から継承し、この段階では未だ少数例に過ぎない。ただしこの類型甕は、後期前葉には安定した存在(第2図31)となっていく。沈線文系列の主文様であるコの字重ね文は、地文縄文を失い、櫛描で施文する例(第2図21)もみられる。また同じ沈線文系列に含まれる斜線充填三角文(第2図22)が散見される。これは壺胴部文様の転用ともいえるが、施文原理はコの字重ね文と同じで、三角形の基線内を縦横の平行線で充填するか、三角基線にそって方向を変えた斜線充填とするかによって別の文様となるに過ぎない。この三角基線の頂点部に円形貼付文を配するのも共通する。3期新段階の第2図27は櫛描波状文の上にこの三角基線をそのまま文様化した例である。

3期新段階の甕は、体部上位の張出しが強く「無花果」形が主流となる。体部文様で、櫛描波状文は横帶重畳が乱れ波形も一定しない。櫛描羽状文系列では、間隔がまばらで、縦列相互の重なりが著しくなるため、斜格子文

と大差のない文様が多くなる。

以上、3期古・新段階は、栗林3式にほぼ併行すると考えられ、頸部簾状文の盛行は松本平の「百瀬式」に対比できる。

栗林式系土器から樽式への変化

3期の土器群でみられた変化傾向は、後続する樽式1期に引き継がれ、画一的な型式として進展していく。この段階での変化過程は極めて漸移的であり、3期の栗林式系土器群を母体にして、大きな外的影響を受けずに自律的な変遷を遂げたことが分かる。

壺 口縁の伸長と胴部全体の球形化が始まる。このため、胴部最大径は中位にある例が多い。文様は頸部への櫛描簾状文と櫛描波状文の組み合わせが定着し、2a装飾帯への沈線鋸歯文が目立つ。縦位沈線スリットで区切るT地文もみられるが、地域性により多寡がある。第1図28の林製作所例は、2a装飾帯の沈線波状文、4～5装飾帯への重連弧文に栗林式系の文様装飾の継承をみるが、球胴化の進んだ器形から、3期新段階より後出と考える。ともに出土した同図30は、頸部簾状文と2a装飾帯に細沈線波状文をめぐらせた例で、器形の特徴も後出的である。林製作所例の2者と比べると同図29の有馬寺畠例はやや新しい様相を示しており、従来の編年観では、ここから樽式1期としてきた(大木2020)。本稿では林製作所例を、3期新段階の栗林式系土器より新しく、従来の樽式1期よりも古いとする中間的な位置づけで捉えておきたい。従って、ここで線引き区分は便宜的であり、同時期資料の再検討の余地が大きい。

甕 3期からの口縁下の胴部上位が張る器形は継承されつつ、口縁の伸長や口唇部のつまみ上げナデ整形が目立つ。頸部文様は櫛描簾状文で、体部文様は櫛描波状文の重疊が主流となり、羽状文系が激減する。そのなかで、体部の上半に櫛描波状文、下半に羽状文を併用する類型(第2図31)が普及する^(註4)。ただし、2期～3期に見られた同類(第2図14・20)に比べて、上下文様を画す波状文が見られず、まばらで乱雑な施文は同類型の退化様相を示す。沈線文系列では、小型甕や台付甕で多用されたコの字重ね文が消滅する。その代替として、斜線充填三角文(第2図32・33)が定着する。斜線充填三角文は壺文様の鋸歯文と同じく、細く鋭利な施文具で描かれており、沈線文が直線的なモチーフに限定される要因となつたらしい。

栗林式系から樽式への移行型式として、樽1期の土器群(若狭1996、大木2020)が位置づけられ、その特徴は北信地方における吉田式とほぼ同様といってよい。ただし、壺頸部文様である矢羽状文やT字文の地域的な多寡が見られるようで、同一型式と認定するには尚早だろう。佐久地方等も含めた地域性に関する型式学的検討が必要になろう。

なお、文様要素から縄文が消失するのもこの段階の大きな特徴と指摘されるが、古利根川を越えた赤城山南麓地域の北三木堂式や、埼玉県中部丘陵地域に分布する吉ヶ谷式のように縄文施文系土器群が相前後して存在したことが想定されるので、注意が必要である。

以上に見てきたように、栗林式系からの漸移的変遷を遂げつつも、伝統的な文様構成からの転換がみられる点を評価すれば、栗林式系土器ではなく樽式の範疇として理解するべき段階であるのは間違いない。

2. 遺跡分布による地域別動向

ここでは、前節で検討した弥生土器編年案をもとに、県内の主要な弥生遺跡の存在時期を整理する(第1表)。また、遺跡の地理的分布に基づく地域区分を行い、地域ごとに遺跡の消長と遺跡分布の変遷を見ることとした。時期認定は報告書掲載遺物に基づき、図示資料がない場合には、報告書記載の時期認定を参考にした。当然のことながら、発掘調査等で判明するのは遺跡全体の一部でしかなく、欠落する時期が示すのは、遺跡不在の状態か、あるいは限られた調査範囲で該当時期の遺構・遺物に調査が及ばなかったかのどちらかだろう。そのため、遺構に伴わず、小破片の土器であっても、存在の可能性が見込める場合は表中に「○」で示した。

なお、本稿では弥生中期後葉の遺跡分布傾向を再検討することが目的であるため、弥生前～中期中葉と後期以降については、分布傾向の変化に関する事象にのみ言及するつもりである。個別遺跡の内容についても略述するにとどめたい。

鎌川中流域 群馬県南西部の富岡市域付近で、鎌川と高田川が合流する地点を中心とする。鎌川は佐久盆地と榛名山東南麓を直線的に結ぶルート上を東流しており、南側山麓を流下する支流の雄川が甘楽郡甘楽町で合流する。雄川は合流点手前で扇状地を形成し、ここで遺跡分布が東西に分かれれる。この雄川合流点までの西方域を便宜的に中流域、以東の烏川合流点までを下流域と呼ぶ。鎌川の南岸には段丘地形が発達しており、この段丘上に前期～中期中葉の在来系土器を出土する遺跡が連綿と分布する。鎌川中流域では、支流の高田川と合流する地点の北岸に栗林式系遺跡が進出する。その嚆矢となったのが黒川小塚遺跡で、2期を中心に営まれた環濠集落である。報文掲載資料では、3期段階が稀薄で集落域を移動した可能性があり、後期初頭に再形成するが、その後の樽式2期からまた見られなくなる。この断続的な空白期を埋めるように、高田川を挟んだ右岸の低丘上に阿曾岡・権現堂遺跡が営まれている。阿曾岡・権現堂遺跡は2期以降に出現して以後、古墳時代前期まで長期継続する集落で、黒川小塚から当地域の中核集落の役割を引き継いだと考えられようか。阿曾岡・権現堂とほぼ同時期に、

上流方向に遡った地点に南蛇井増光寺遺跡(富岡市)があり、2期中段階から3期古段階の小規模な集落が形成されている。南蛇井増光寺遺跡では3期新段階から樽式2期古段階まで空白期間があるので、中期後葉の集落は一時的な存在だったようだ。鏑川南岸では中高瀬觀音山遺跡(富岡市)が、中期後葉の3期新段階から栗林式系土器の存在が明確になり、高地性集落かとも評される後期の拠点的集落に続いている。なお、中高瀬觀音山遺跡では、中期中葉以前の在来系土器が見られるが、中期後葉の2期～3期古段階が不明瞭でここでは空白期間と考えておく。鏑川中流域で弥生遺跡の分布に大きな変化が見られるのは後期初頭である。空白期間後に再開される黒川小塚遺跡のほか、東八木・宇田恵下原・一ノ宮押出遺跡等が新たな地点に出現し、南岸丘陵地でも内匠日影周地遺跡等の進出が見られる。中核集落と考えられる阿曾岡・権現堂遺跡は継続しているので、小集団規模での新たな地点への進出とみてよいだろう。

碓氷川・高田川流域 碓氷川流域は群馬県西毛地域と長野県東部の佐久盆地や上田盆地とを直結する地帯である。碓氷川の支流である九十九川や柳瀬川に沿って形成された大小の谷地形には、狭い面積でも灌漑用水確保が容易と思われる水田可耕地が多い。碓氷川右岸には、標高350～230mの横野台地が東西方向に延び、その南西側には鏑川支流である高田川が南東方向に流下する。横野台地は南北幅が狭く、高田川中流付近でも1～2km程度である。横野台地上は高燥で水源に乏しく、水田可耕地は台地から見下ろす河川流域の谷地形と考えられる。

横野台地における弥生遺跡の分布傾向については若狭徹がまとめている(若狭2001、2003)。中期後葉の遺跡については、発掘例に恵まれない時点ではあったが、県内他地域の様相も踏まえたうえで、栗林式系集団による水田可耕地への進出と推定した。また、井上慎也は横野台地において中期中葉以前の弥生遺跡がまとまって分布し、かつ集落・墓域といった関連性が把握可能な好条件から、集落の短期移動型の動向を推察している(井上2014)。ところが後続する中期後葉の遺跡が横野台地では稀薄で、碓氷川北岸の安中台地(九十九川流域)に分布が移るとの認識であった。これを改めることになったのは、近年における二軒在家原田頭(安中市)、上高田社宮子原・下高田白山遺跡(富岡市)の発掘成果による。これらは本稿編年の1期から2期古段階の良好な資料を含むことから、これまで不分明であった時期を埋めることとなり、群馬県域全体の分布動態を把握するうえでも重要な資料となった。二軒在家原田頭遺跡は、検出された16棟の竪穴建物の遺構間重複から2～3世代程度の期間が見込まれ、本稿の土器編年で1期(栗林編年では1式～2式古)に位置づけられる。上高田社宮子原は1期以降3期新段階まで、下高田白山遺跡は2期古段階が判明し

ており、横野台地西側が群馬県内でも早くから栗林集団が進出した地域と位置付けることができよう。この3遺跡は相互に2km前後離れて位置し、時間的に連続するか、ほぼ同時期に併存した集落と考えてよい。また、台地南縁に立地する下高田白山遺跡と、反対側の台地北縁に約2.4km離れて立地する長谷津遺跡(安中市)も、2期古段階に併存した可能性が高い。この両遺跡は台地の南北縁にあって、直下の水田可耕地は流域を分けるが、背後の台地上の土地を共用するといった、極めて近しい関係でもあったのではないだろうか。

一方、横野台地とは高田川を挟んで南側対岸の丘陵に立地する古立東山・古立中村・八木連西久保遺跡では、集落遺構は不明だが、古相の栗林式系土器が在来系の長根安坪式とともに見られる。これは進出した栗林集団と在来集団による狭い地域内での共存交流関係とみることができ、さらに古立東山遺跡での石戈、八木連西久保遺跡の銅戈片出土例についても、馬場が指摘するように(馬場2018)、栗林集団との交流関係を前提にして理解さるべきものだろう。

高田川流域から横野台地にかけては、中期後葉に進出した集落をそのまま継承したと考えられる後期遺跡はない。上高田社宮子原遺跡を除けば、編年3期の段階に空白期があり、後期初頭にあらためて再開する様相がうかがえる。この傾向は碓氷川北側の支流域でも同様で、後期以降は、小日向地区遺跡群(安中市)のように、長期継続型で流域における拠点的集落が誕生する。高田川流域～横野台地で、後期まで継続する長期継続型集落が見られないのは、限られた水田可耕地での生産量によるものと推測されるが、中信地方と結ぶ交流ルートの中継点として、その重要性は後期に至っても変わらず維持されたと思われる。

鏑川下流域 雄川の合流点以東で、甘楽郡甘楽町と旧吉井町(現高崎市)にあたる地域を便宜的に鏑川下流域と呼ぶ。弥生遺跡は右岸段丘上に濃密な分布を見せるが、前期～中期中葉と後期以降にほぼ限定され、本稿で対象とする中期後葉の栗林式系集落遺跡は見られない。神保植松遺跡をはじめ、中期中葉の弥生土器の標式遺跡である神保富士塚遺跡や長根安坪遺跡等の存在から、中期中葉までは途切れることなく在来集団の生活領域であったことが分かる。栗林集団との接触は、長根安坪遺跡でごく少量の土器片でうかがわれる程度に過ぎない。一方で、後期の初頭段階から新たに出現する遺跡が急増する。この時期に形成された白倉下原遺跡・笹遺跡・安坪古墳群・西原II・川内遺跡等では後期を通して営まれる長期継続型集落として発展する。この現象は、中期後葉の遺跡が空白だった地域だけに、別地域からの移住集団によるものと考えたい。この新開集落遺跡で見られる樽式土器の地域色は、榛名山東南麓とほぼ同じ「高崎型」(大木

第1表 弥生集落消長図(鎌川中流域～渋川地域)

| 区分 地域 | 遺跡名 | 前期 中期前 | 中期中葉 | | 中期後葉 | | | | 後期 | | | | |
|--|------------|-----------|------|------|------|-------|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|
| | | | 前 | 後/1期 | 2期古 | 2期中/新 | 3期古 | 3期新 | 樽1 | 樽2古 | 樽2新 | 樽3古 | 樽3新 |
| 鎌 川 中 流 域 | 南蛇井増光寺 | | | | | | | | | | | | |
| | 黒川小塚 | | ○ | | | | | | | | | | |
| | 阿曾岡・権現堂 | | | | | | | ○ | | | | | |
| | 東八木 | | | | | | | | | | | | |
| | 宇田恵下原 | | | | | | | | | | | | |
| | 一ノ宮押出 | | | | | | | | ○ | | | | |
| | 七日市觀音前 | | | | | | | | | | | | |
| | 中高瀬觀音山 | ○ | | | | | | | ○ | | | | |
| | 下高瀬上之原 | ○ | ○ | | | | | | | | | | |
| | 内匠日影周地・諫訪前 | ○ | | | ○ | | | | | | | | |
| 碓 冰 川 中 ・ 高 田 川 流 域 | 注連引原 | | | ○ | | | | | | | | | |
| | 上人見 | | | | | | | | | | | | |
| | 中野谷・原 | | | | | | | | | | | | |
| | 古立東山 | ○ | | ○ | | | ○ | | | | ○ | | |
| | 古立中村 | | | | | ○ | | | | | | | |
| | 八木連西久保 | | | ○ | | ○ | ○ | | | | | | |
| | 二軒在家原田頭 | | | | | ○ | | | | | | | |
| | 上高田社宮子原 | | ○ | | | | | | | | | | |
| | 下高田白山 | | | | | | | | | | | | |
| | 長谷津 | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| 鎌 川 下 流 域 | 荒神平・吹上 | | | | | | | | | ○ | | | |
| | 小日向地区 | ○ | | | | | ○ | | | | | | |
| | 国衙下辻・下辻II | | | | | | | ○ | | | | | |
| | 杉名薬師 | ○ | | | | ○ | | ○ | | | | | |
| | 天引狐崎 | ○ | ○ | | | | | | | | | | |
| | 白倉下原 | | | | | | | | | | | | |
| | 笛 | | | | | | | | | | ○ | ○ | |
| | 神保植松 | | | | | | | | | | | | |
| | 神保富士塚 | | | | | | | | | | | | |
| | 長根安坪 | | | | | | | | | | ○ | | |
| 榛 名 山 東 南 麓 | 安坪古墳群 | | | | | | | | | | | ○ | |
| | 西原II | | | | | | | | | | | | |
| | 中原 | | | | | | | | | | | | |
| | 折茂II・IV | | | | | | | | | | | | |
| | 川内 | | | | | | | | | | ○ | | |
| | 高崎城三ノ丸 | | | | | | | | ○ | | | | |
| | 上並榎南 | | | | | | | | | | | | |
| | 竜見町 | | | | ○ | | | | | | | | |
| | 高崎競馬場 | | | ○ | | | | | ○ | | | | ○ |
| | 高闘振村・村前 | | | | | | | | ○ | | | | |
| 渋 川 地 域 | 下里見宮谷戸 | | | | | | | | ○ | | | | ○ |
| | 熊野堂/雨壺 | | | | | | | | ○ | | | | |
| | 大八木・伊勢廻 | | | | | | | | | | | | |
| | 浜尻 | | | | | | | | ○ | | | | |
| | 新保/新保田中村前 | | ○ | | | | | | | | | | |
| | 引間 | | | | | | | | | | | | |
| | 高崎情報団地I | | | | | | | | | | | | |
| | 西島相ノ沢 | | | | | | | | | | | | |
| | 鈴ノ宮 | | | | | | ○ | ○ | | | | | |
| | 稻荷町I | | | | | ○ | | | | | | | |
| | 清里庚申塚 | | | | | | | | | | | | |
| | 押手 | | | | | | | | | | | | |
| | 金井遺跡群 | | | | | | | | | | | | |
| | 有馬条里 | | | | | | | | | | | | |
| | 中村 | | ○ | | | | | | | | | | |
| | 有馬廐寺 | | | | | | | | | | | | |
| | 石原田中 | | | | | | | | | | | | |
| | 有馬寺畠 | | | | | | | | | | | | |

第2表 弥生集落消長図(赤城山南麓～北毛地域)

| 区分 地域 | 遺跡名 | 前期 中期前 | 中期中葉 | | 中期後葉 | | | | 後期 | | | | |
|----------|----------|-----------|------|------|------|-------|-------|-----|----|-----|-----|-----|-----|
| | | | 前 | 後/1期 | 2期古 | 2期中/新 | 3期古 | 3期新 | 樽1 | 樽2古 | 樽2新 | 樽3古 | 樽3新 |
| 赤城山南麓 | 徳丸仲田 | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | ○ |
| | 一万田 | | | ○ | | ■■■ | | | | | | | |
| | 櫛島川端 | | | | | | ■■■■■ | | | | | | ○ |
| | 新田上 | | ■■■ | | | | | | | | | | |
| | 頭無 | | | | ○ | ■■■ | | | | | | | |
| | 西太田 | | | | | ■■■ | | | | | | | |
| | 西迎 | | | | ○ | ■■■ | | | | | | | |
| | 荒砥前原 | | ■■■ | | | | ■■■ | | | | | | |
| | 荒口前原 | | | | | ■■■ | | | | | | | |
| | 荒砥北三木堂 | | | | | | ■■■ | | | | | | |
| 東毛地域 | 西野原 | | | | | ○ | ■■■ | | | | | | |
| | 西長岡東山古墳群 | | | | | | ■■■ | | | | | | |
| | 成塚向山 | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | |
| | 八ヶ入 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | |
| | 西長岡宿 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | |
| | 阿久津宮内 | ■■■ | | | | | | | | | | | |
| 北毛地域 | 寺谷 | | | | | ○ | ■■■ | | | | | | |
| | 生品小鳥沢 | | | | | | ■■■ | | | ○ | ■■■ | | |
| | 観音堂 | | | | | | | ○ | | | ■■■ | | |
| | 十二原 | | | | | | | ■■■ | | | | | |
| | 八束脛洞窟 | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | |
| | 川額軍原 | | | | | | | | | | | | |

2020)が主流である。鏑川中流域では「富岡型」を多用することから、この下流域での新開集落の担い手は、鏑川中流域からではなく、榛名山東南麓からの弥生集団である可能性が高い。

榛名山東南麓地域 榛名山東南麓には南東方向に緩く傾斜する低台地が展開しており、西から南辺にかけては烏川が地形を画す。この台地は中央付近を東南流する井野川とその両岸の井野川低地帯によって東西に大きく地形が分けられる。ここでは便宜的に西側を「高崎台地」と呼称する。榛名山西麓を東南方向に流下する烏川の源流は、群馬県北西部の吾妻地方に近い。烏川流域を遡上し長野県北部に通じる吾妻川流域までは、さほど高くなない峠を越えるだけで到達する。一方、高崎台地の西方では、中信地方に通じる碓氷川が烏川に合流する。さらに高崎台地南側では、佐久地方に通じる鏑川との合流点がある。いわば、高崎台地は長野県の北・中部地方戸を結ぶ河川沿いルートの合流する結節地点といえる。

この地域における弥生遺跡の分布傾向と動向については、柿沼恵介の詳細な論述がある(柿沼2003)。これによれば、中期前葉まで「空白域」だったこの地域に中期中葉段階になって小規模な集団の進出が始まり、やがて「第一展開期」と呼ぶ中期後葉の集落群形成を迎えるという。この分布動向は、第1表で明らかなように、新資料が追加された現時点においても、この捉え方にほとんど修正の余地はない。集落形成の嚆矢と位置付けられた新保遺跡は、井野川低地帯の東側微高地上に立地し、栗林式土器分布圏のなかでは東端付近の位置を占める。隣接する新保田中村前遺跡を合わせて、古墳時代前期まで継続す

る地域の核となる集落といってよい。また、北毛、東毛、および南関東地方と結ぶ交通上の結節点ともなりうる地理的位置からみて、榛名山東南麓地域における中継基地的な役割も担っていた可能性があろう。注意すべきは、新保遺跡からさらに9kmほど東南方に離れた一万田遺跡・上飯島芝根II遺跡(いずれも玉村町)で、竪穴建物や土器棺墓壙が検出されたことだ。一万田遺跡の土器棺に使われた甕は中期後葉の2期段階のもので^(註5)、新保遺跡で集落形成が始まった時期と近い。土器片だけであるが、同時期の遺跡は徳丸仲田遺跡(前橋市)でも確認できる。このことは、新保遺跡と異なって短期在住型の小規模集団が編年2期の段階ですでに栗林式分布域の東限地域へ進出していたことを示す。東端以外の榛名山東南麓地域内で、栗林集団の比較的早い段階での進出が見られるのは、井野川上流域の熊野堂遺跡(高崎市)や、榛名山南麓端の烏川に臨む下里見宮谷戸遺跡(旧榛名町)である。下里見宮谷戸3・4号竪穴からは2期中段階のまとまった資料が出土しており(高崎市教育委員会2019)、新保遺跡からさほど遅れずに集落形成の始まったことが看取される。一方、烏川左岸に沿って陸続と環濠集落が並ぶ高崎台地西側において、現時点で判明しているのは3期段階の遺跡がほとんどであり、遺跡内容は不明ながら、竜見町遺跡の壺がやや古い2期新段階を示している。以上から、初期段階の進出は、西から東への漸進的なものではなく、複数の小規模集団が広い範囲に点在する状況だったようである。そして、その後に定着していくことが明らかなのは井野川上流域や新保遺跡周辺であり、これ以外に進出した集団は何らかの理由で集落定着ができ

なかったと考えられる。

榛名山東南麓地域における初期の進出を果たしたフロンティアの集落がしばらく継続したのち、編年2期新段階～3期に各所で環濠集落群が形成されるようになる。これが中期後葉における分布上の大きな動向である。井野川上流域では、熊野堂遺跡からやや下流側に地点を移して、環濠集落である浜尻遺跡A・B地点をはじめ井野清水・井野川・井野吉岡遺跡等で遺跡群が形成される。一方鳥川左岸には、上並榎南・巾・高崎城三の丸遺跡等といった3期の環濠集落が並んで立地、鳥川左岸からやや台地側に入った地点には、長径160mの環濠集落が判明した高崎競馬場遺跡、その北側には高閑堰村・東沖・村前遺跡があり、にわかに高崎台地の中央部に展開する環濠集落密集地となる。以上のような榛名山東南麓に形成された3期の弥生集落の分布状況は、中期末頃になって大きな変化を示す。高崎台地上の環濠集落群がそろって終焉を迎える、少なくとも同一地点での集落存続は見られない。この現象は、井野川流域の浜尻遺跡ABや、榛名山東麓に離れて存在する清里・庚申塚遺跡でも同様にみられる。これと呼応するように、井野川中流域では西島相ノ沢・高崎情報団地遺跡等で後期初頭からの新開集落が成立する。榛名山東南麓地域の内部だけで完結する動向ならば、解消した高崎台地の環濠集落構成員による移転とも考えられるが、前述の鎌川下流域での同一現象を関連させれば、より広範囲に及ぶ集団移動であったことが実態ではないかと考える。

渋川地域 榛名山東～北東麓と、利根川と吾妻川が合流する地域である。ここでは、押手遺跡(旧子持村)や南大塚遺跡(渋川市)、近年では金井遺跡群(金井東裏遺跡と金井下新田遺跡を総称する)等の段丘上にある遺跡で、前期から中期中葉段階にかけての再葬墓と推定される遺跡の存在が知られている。これらに続く中期後葉の遺跡は稀薄で、低平な水田可耕地が展開する榛名山東麓裾野に進出した有馬条里・中村遺跡での集落形成が目立つのみである。断片的資料から各所に遺跡の存在は予想されるが、6世紀代の榛名山噴火によるテフラで厚く覆われた地域もあり、未知の遺跡が多数埋もれている可能性は高い。この地域事情を加味しても、後期初頭から新たな集落遺跡が各所で出現する現象は、他地域でみた動向と同じである。有馬廃寺・有馬寺畠遺跡等は低平地に臨む新開集落として後期初頭の樽式1期に登場するが、その後は集落地点を替えている。おそらく近接地域で樽式2期以降に継続展開する有馬遺跡や有馬条里遺跡等の集落形成に参画したと考えられよう。また、吾妻川と利根川合流点の北側でも、樽式1期に白井掛岩遺跡、樽式2期には中郷田尻遺跡等が形成されていく。利根川東岸にあたる赤城山西麓では、さらに遅れて樽式3期以降まで待つことになる。

赤城山南麓地域・東毛地域 南向き緩斜面の南西側は古利根川流路と考えられる広瀬川で区切られ、東半の山麓斜面上には、大間々扇状地が形成されている。弥生中期後葉の遺跡分布は大きく2か所に分かれ。一つは標高400m付近の山麓中腹斜面に位置する西迎遺跡(旧粕川村)であり、もう一つは標高100～70m前後の山麓南端にあって、南流する荒砥川と山麓端に沿って流れる広瀬川が合わさる地域で、広い水田可耕地が目前に開ける地形となっている。西迎遺跡はやや深い谷が刻まれる山麓地形のなかでは比較的平坦な地形を選んだ立地である。周辺では、極めて小規模な遺跡以外に同時期の遺跡は見られず、孤立的な存在といえる。一方の山麓南端には、小規模ながら複数の遺跡がまとまって分布する。荒口前原・荒砥前原・荒砥北三木堂・富田宮下・西太田遺跡等が知られている。調査範囲にもよるが、判明している遺構分布の範囲と密度からは、いずれも小規模で短期的な集落遺跡とみられる。これらは荒砥川に沿って北西から南東方向に6kmほどの範囲に分布しており、出土土器の年代観からはほぼ同時存在といってよいと思われる。特徴的なのは、出土した土器群が栗林式系ではなく、縄文を主文様とする北三木堂式(大木2018)と東北地方南部の渦文系、および栗林式系との共伴や折衷形態が頻繁にみられる点である。異型式折衷の様相は荒口前原遺跡の土器群が代表例で、1個体ごとに全く異なる文様と器形の壺群が一括出土している。これらは後続する時期に一つの型式として収斂することなく、一時的な存在といえる。その中で、縄文を文様要素の主体とする北三木堂式は、これらの折衷土器群と併存しつつ、いずれの遺跡でも見られるので、この地域の中核型式と考えてよい。荒砥前原遺跡では、北三木堂式に「フラスコ文」と呼ばれる文様モチーフが見られる。これは埼玉県北部の北島式や栃木県南部の大塚式(藤田2008)に特徴的なことから、地理的な隣接関係からもこの両型式との類縁性が強いと考えられる。西迎遺跡においても、異型式の共伴と折衷様相が見られるが、北三木堂式よりも栗林式系要素が多い。この相違の背景には、集落を担った集団の系統が異なったためとの理解も可能だろう。この想定が正しければ、西迎遺跡は西毛地域の栗林式分布圏からの前進基地的性格を帯び、一方の山麓南端の遺跡群は北三木堂式の集団による小規模拠点と考えられる。土器型式の混在・折衷様相から、西毛地域の栗林式分布圏と埼玉県北部、および東北地方南部の集団が交流する拠点として機能していたことが推測されよう。ただし、埼玉県北部と東北地方南部との交流は、中間に位置する栃木県南部の大塚式分布圏を経由するルートが有力である。そうであれば、埼玉県北部の弥生集団にとっての赤城山麓南端の遺跡群は、西毛地域の栗林式分布圏と結ぶ中継地点としての意味合いが強かったのであろう。赤城山麓南端の遺跡群の

位置は、古利根川の左岸側に面している。この立地の背景には、水田耕作適地としてだけでなく、古利根川に沿った地域間ルート上に位置する中継拠点としての選地も意図していたのではないだろうか。

赤城山南麓の東に展開する大間々扇状地で、新期に形成された東側は泛水性の地形のため、好適な水田可耕地は扇端付近の湧水分布帯より南側に展開する。ところがこの地域では、現時点で弥生中期後葉の遺跡がほとんど確認されていない。遺跡の存在が判明しているのは、扇状地東端の渡良瀬川右岸に沿った茶臼山丘陵縁辺部である。西長岡東山古墳群(宮田1991・1992・2001)や向山古墳群、あるいは西野原遺跡等では、赤城山南麓地域と同じく小規模で短期間の集落、出土する土器群も栗林式系・北三木堂式・北島式・大塚式・東北地方南部渦文系土器による混在様相がうかがわれる。赤城山南麓および東端の茶臼山丘陵地区の遺跡の共通点は、土器様相以外に編年上の位置づけが中期後葉でも最新段階にほぼ限られることである。これらの遺跡で伴出する栗林式系土器の特徴から、その時期は本稿編年の3期新段階に併行する。荒砥前原遺跡では後続する後期初頭の樽1期併行の土器群(平野1976)が判明しているが、これ以降には続かない。赤城山南麓ではこの荒砥前原遺跡を最後に、後期末の樽式3期新段階まで弥生遺跡の分布が見られなくなるのである^(註6)。換言するならば、弥生中期末段階にのみ、限られた場所に小規模の弥生集団が集落を形成していた、ということになる。そして、中期末をもって大部分が消滅する分布動向も、栗林式系の遺跡が分布する古利根川以西と全く同じであることが知れる。

北毛地域 最後に北毛地域に触れておく。いわゆる利根川の上流域に位置し、片品川が合流する地点の沼田台地が弥生遺跡の主な分布地となる。再葬墓関連のみなかみ町八束脛洞窟(旧月夜野村)では、わずかな土器片資料の中に栗林1式相当の土器破片が見られる。これは縄文を地文に振幅の大きい斜行波状文を3装飾帶に描いた壺片で(工楽1968)、現在は栗林1式と認識される長野市荒山出土の壺(八幡1932)と同一文様である。これ以外で栗林式系土器が知られるのは、白沢村寺谷遺跡、沼田市生品小鳥沢遺跡で小規模な集落が知られているだけである。なお、赤城山北西麓の昭和村川額軍原遺跡では甕棺墓が確認されている。以上の遺跡はいずれも編年3期に属す短期小規模の遺跡といってよい。北毛地域でも、中期後葉の遺跡は末期に消滅し、代わりに全く異なる地点に後期初頭の遺跡が形成される。沼田台地の北側対岸にあたる三峰山南麓端に形成された観音堂遺跡(旧月夜野町)はその代表例で、後期前葉から集落形成が始まり、後期末まで継続する拠点的集落となる。

ところで、吾妻川流域も北毛地域で扱うべきだが、長野原町の八ッ場ダム地域を除けば、公表資料が極めて少

なく、時期認定や分布傾向の把握には尚早と考え、第1表では扱っていない。八ッ場ダム地点を含む吾妻川上～中流域では、林中原II遺跡(群埋文2019)で中期前葉の集落が確認されたほか、縄文晩期後葉から弥生中期前葉にかけての遺跡が群馬県内でも有数の密度で分布する。このエリアから下流側にあたる吾妻川左岸に、ランドマークといえる岩櫃山の岩壁が聳え、再葬墓関連の岩陰として著名な鷹巣遺跡が存在する。ところが、これらに後続する中期中葉以降の弥生遺跡については、極めて稀薄な分布状況しか見られない。岩櫃山を眼前に見上げる吾妻川右岸に立地する新井遺跡(東吾妻町)は、3期古段階に位置づけられる小規模な集落(群埋文2022b)だが、東北地方南部の陣馬式と思われる壺が共伴したことで注目される(第1図参照)。新井遺跡の位置は、南方に位置する峠を越えて烏川上流域に向かう交通上の分岐点にあり、遠く東北地方南部と北信地方を結びつける交通ルートの一中継地点であった可能性は高い。その生産域は吾妻川沿岸というより、この地点で吾妻川に合流する温川の流域に開析された低地と思われる。温川流域は、峡谷の続く吾妻川よりもやや広い開析低地と緩斜面の段丘が見られ、未発見の弥生遺跡の存在が想定できる地形となっている。今後の発見に期待したい。

3. まとめ

群馬県における中期後葉以降の遺跡分布に見る集落形成の推移について、まとめておこう。弥生前期～中期中葉では、粗密の差は見られながらも全県下に分布しており、著しい偏りは見られない。立地は河川を見下ろす段丘や台地、山麓地形に立地することが多い。ただし、低地に近接する沖II遺跡(藤岡市)の例からは、現在は広域な低地が展開する県南東部でも、沖積層に覆われた弥生時代旧地表面の微高地には、未だ確認されない遺跡の存在が予想される。県南東端に近い太田市尾島の阿久津宮内遺跡、板倉町の飯野辻遺跡や雲間遺跡などは、低地域にあってその存在が判明した稀少例である。前期～中期中葉の集落遺跡は、現時点で数えるほどしか確認されておらず、多くは再葬墓関連の遺跡となっている。また集落遺跡であったとしても、小規模で遺物出土数が少ない傾向から、定着期間が短く移動性が高いと想定され、遺跡の分布には転々と移動する集落の痕跡が反映されている可能性が高い。その好例として、注連引原遺跡群をはじめとする安中市横野台地での遺跡群があげられ、その分析成果(井上2014)については前述した。他の地域では未だ遺跡の内容に不明瞭な点が多く、弥生前期～中期中葉段階の遺跡群に関する動態分析研究は今後の課題となっている。この点で、八ッ場ダム建設に伴って広域に及ぶ埋蔵文化財の全面調査を行った吾妻川流域の長野原地区での研究成果が期待される。

さて、本稿の主旨である弥生中期後葉の遺跡分布と、時間軸に沿った分布動向は、地域によって各々の特徴をうかがうことができた。その主たる担い手である栗林集団の最初の進出は、中期中葉後半にあたる本稿土器編年の1期に始まる。現時点で、この時期の明確な集落として判明しているのは二軒在家原田頭遺跡だけだが、碓氷川上・中流域から鎌川中流域で他にも集落形成が開始されていた可能性が高い。これに続く2期古段階では、分布域を拡げて、熊野堂・下里見宮谷戸・新保遺跡のように、榛名山東南麓地域にも進出を始めたらしい。

ここでは土器編年1期から2期古段階をまとめて、栗林集団による集落形成の第1段階と呼ぼう。第1段階では、碓氷川上・中流域を起点に、高田川流域を下った鎌川中流域、碓氷川を下って榛名山東南麓地域まで展開した様相がうかがえる。千曲川流域の北信地方や佐久地方からの進出を想定すれば、吾妻川流域や鎌川上流域でも第1段階の集落遺跡が今後に発見される可能性は残されている。それは将来の課題として、第1段階の集団進出が前橋市南部から佐波郡玉村町にかけての沖積平野部まで到達していることの確認が重要である。碓氷川上・中流付近は、栗林集団の本領地である千曲川流域との地理的関係からすれば、上信国境の峠を越えて到達する最初の地域として当然のことであろう。一方、榛名山東南麓から南東沖積地に進出した遺跡は、水利環境に優れる低地に面した立地であることから、本格的な水田開拓を目的とした進出であることは明らかだ。地形等の環境条件や開拓に要する稼働規模によって、水田開拓の成否が左右されたと考えられ、開拓の初期段階では転々と居住地を替えたことが推測される。徳丸仲田遺跡や一万田遺跡はこのような集団の残した痕跡例ではなかったろうか。

編年1期～2期古段階に属する栗林式系土器の出土例は、下高瀬上之原遺跡(富岡市)、八束脛洞窟(みなかみ町)、金井遺跡群(渋川市)など、中期中葉における在来集団が残したと思われる遺跡でも見られる。これらは少數の客体的存在であり、北・中信地方から直接、あるいはすでに群馬県内に進出していったフロンティア集団との接触により残されたものだろう。また断片的ながら、加賀地方の小松式やその影響がこの段階で点々と見られることから、すでに北陸地方南西部の弥生文物や情報が北信地域を経由して群馬県内の各地に到達していたとの憶測は許されよう。

第1段階における集落遺跡の様相とその後の展開は、地域によって異なる。横野台地では、短期間の遺跡と継続的集落である上高田社宮子原遺跡が併存しており、上高田社宮子原遺跡の調査範囲で見る限り、その規模に目立った拡大傾向はうかがえない。このことは、初期の開村集団内での自然人口増はあるても、後続する栗林集団が次々と既存集落に参入するといった状況ではなかった

のだろう。これに対し、鎌川中流域ではまず環濠集落が形成され、第2段階以降も継続的に営まれて、地域の中核拠点となり得る集落に発展していく。信州地域と結ぶ交通路上の交点部分という重要な地理的位置に立地することが、黒川小塚や阿曾岡・権現堂遺跡の存在感を支えていたものと類推する。

榛名山東南麓地域では、第1段階で水田開拓を目指した小規模な集落が出発点となり、これ以降に井野川上流域や新保遺跡周辺で、遺跡群の形成や拡大現象がうかがえる。これは水田經營に成功し、集落の順調な発展を導いたものと考えられる。井野川中流域の東側微高地に形成された新保・新保田中村前遺跡(高崎市)は、古墳時代まで長期継続する大規模拠点集落に発展していくが、第1段階での集落は出土土器量から、小規模であったことが類推される。この段階の担い手となった栗林式系の小規模集団は、都出比呂志が仮定した「世帯共同体」(都出1979)に相当するものといえようか。その場合に、血縁関係による紐帶の是非はともかくとして、新天地での開発にあたり、構成員の生命維持といった最低限の保障を無条件に共有し、しかも立地環境の条件によっては転々と居住地を替えることも可能な程度の、緊密に結びついた集団単位であったのだろう。

集落進出の第2段階は、編年2期の中・新段階に始まる。ただし、この時期の遺跡分布状況からは、「進出」というよりも、第1段階の進出地を基盤として、集落規模を拡大・派生していく段階と言えよう。鎌川中流域では、高田川との合流地点で黒川小塚遺跡が定着した姿を見せ、ここから鎌川を遡った地点の南蛇井増光寺遺跡では新たに小規模集落が営まれる。碓氷川流域でも北側を流れる支流の九十九川流域付近で新たに小規模集落の進出が見られる。榛名山東南麓の井野川上流域では、熊野堂遺跡を基点として、大八木伊勢廻遺跡等の新たな集落の形成がみられるようになる。河川流域を共通基盤とする遺跡群形成の開始と理解したい。そして、この段階では突出した大規模集落の存在はまだ見られず、黒川小塚遺跡を除いて環濠集落の確実な例も出現していない。このような分布状況と集落様相から、水系単位での生産域や集落分布の拡充が行われた段階と評価できよう。

ところで、編年2期古段階の前後頃に、群馬県内に存在した弥生在来集団による遺跡が見られなくなる現象がある。鎌川流域の南側段丘上には前期～中期中葉の遺跡が連綿と存在していたが、その最終段階といえる長根安坪遺跡に後続する在来系集団の痕跡が現在まで確認されていないのだ。赤城山南西麓裾野の丘陵地形に立地する新田上遺跡(前橋市)でも、長根安坪式土器を伴う小規模集落(群埋文2015)が確認されているが、やはり後続遺跡の姿は見られない。在來の弥生集団は、水田經營を主生業とする栗林式系の集落遺跡に合流したか、あるいは別

の地域に移転したと考えるほかはないが、現時点でそれを明らかにする手掛かりは得られていない。

この現象の背景について、まず栗林集団の進出があり、その影響を受けた在来集団が(水田開発を旨とした)低地や自然堤防上に立地するようにならざるを得ないためとする理解(若狭2003、p.99)は無理ではない。ところが、その後に出現する中期後葉の遺跡において、出土する土器は栗林式系土器のみで組成されており、在来系土器の要素は全く見られない。土器以外の考古学的資料でも在来集団の系譜が明らかな痕跡について現状で見出すことは難しい。のことから筆者は、栗林式系土器を使用する集落遺跡の主たる担い手は、北・中信地方からの移住集団であり、分離した在来集団の一部は栗林集団に取り込まれて同化していったものと考えている。このことに関連して、埼玉県北部に分布する北島式土器に、長根安坪式の組成器種であった筒形土器が伴う点に注目したい。栗林式集団の遺跡分布拡大に対し、棲み分け共存ではなく、鎌川南岸に続く秩父山地東北麓に沿って、新天地への移住を選択した在来系集団の存在を想定しておきたい。

集落進出の第3段階は、第2段階で始まった集落群の分布域が拡大し、さらに地点を替えた集落群形成が特徴といえる。土器編年では3期にあたり、遺跡数の急増ともいえる現象がうかがえる。特記されるのは、榛名山東南麓地域における高崎台地での遺跡分布密度の高さである。井野川上流域では、やや下流側に下った地点で新たに環濠を伴う浜尻遺跡を中心と考えられる集落群が形成され、井野川中流域でも矢島竹之内・鈴ノ宮遺跡などの進出がみられる。それまで遺跡分布の稀薄だった烏川左岸上では、上並榎南・巾・高崎城三の丸遺跡や、左岸からやや離れた低丘上に築かれた高崎競馬場遺跡などの環濠集落が、4.5km程の範囲内に並立する群在状況を示す。しかもその多くが環濠集落の形態をとっている、このことから緊迫した当時の社会状況を想定する考え方(柿沼2003)もみられる。ただし、高崎競馬場遺跡の調査成果の分析から、後述するように筆者はこの考え方を否定的である。むしろ、高崎台地の水田経営と群馬県内における物流や情報伝達の中核を担う一連の集落群と考えたい。

この第3段階では、それまで中期後葉の遺跡分布の見られなかった地域への集落進出も特徴として挙げられる。榛名山東麓の清里・庚申塚遺跡、渋川地域の有馬条里遺跡、吾妻川中流域の新井遺跡(東吾妻町)がその例にあたる。

一方、赤城山南麓から東毛地域では、第3段階に併行して、北三木堂式や北島式・大塚式・東北地方南部の渦文系土器といった非栗林式系土器の影響が強い小規模集落遺跡が限定された地点に分布する。そこで見られる折衷土器の様相から、古利根川以西に分布する栗林集団を

はじめ、埼玉県北部や栃木県南部との盛んな交流関係がうかがえる。赤城山南麓の中腹に立地する西迎遺跡は、このなかでも栗林式系土器の影響が色濃い集落遺跡であり、西毛地域の栗林集団と結びついた東方交流の前衛的役割を帯びていた可能性がある。

他地域に比べて図抜けた遺跡数と分布密度を示す榛名山東南麓地域は、第3段階に至って群馬県内弥生社会の中核地になった感がある。各河川流域に形成された集落群同士が、どのような関係性にあったかは不明であるが、北信地方からもたらされる榎田型磨製石斧や、北陸地方からの鉄製工具、あるいは管玉といった有価物資の流通が盛行し始める時期と考えられ、その中継拠点の存在は十分考えられる。埼玉県北部に位置する前中西遺跡は栗林式系土器を多用する大規模な集落遺跡として知られており(関東弥生文化研究会 埼玉弥生土器観会2013)、栗林集団が早くから進出し、そのまま地域の拠点的集落として存在した。その地理的位置から、栗林集団の南端拠点として、南関東弥生社会と結ぶ物流を支える役割を担った可能性が高いと思う。同様に、高崎台地の環濠集落群や、分布域東端に位置する新保遺跡は、群馬県内の物流・情報が集中する中核的位置を占めたと推測する。それと同時に、群馬県西毛地域に分布する弥生社会の先導的立場も有していた可能性がある。榛名山東南麓地域に展開する広域な生産基盤や、北・中信地方からの主要流通ルートが合流する地理的優位性も、この推測の有力な根拠となり得よう。また、碓氷川・鎌川・吾妻川の各流域や渋川地域に形成された第3段階の弥生社会は、広い水田可耕地には恵まれないものの、各々の流通ルートにおける中継基地としての役割を担っていたであろうことは、容易に想像される。このような流通ルート網の想定から、第3段階における西毛地域の弥生社会は、環濠集落に見られるような個々の独立性を保つつも、物流や情報ネットワークの共有といった結びつきで連帶する関係性が形成されていたと理解しておきたい。

このように、ある程度完成された感のある中期後葉の弥生社会が大きく揺らぐ様相を見せるのが、次代の弥生後期初頭(樽式1期)である。環濠集落をはじめとして、中期後葉に形成されていた集落遺跡の多くが解体し、そこからあたかも拡散するような様相で、小規模な集落遺跡が別地域に出現するのである。前項で詳述したように、この動向は群馬県内のほとんどの地域でみられる現象であった。この中で象徴的なのは、中期後葉の弥生社会において中心的な役割を担ったであろう高崎台地に分布した環濠集落群の終焉である。一方、それと呼応するように鎌川下流域や渋川地域など中期後葉の遺跡が稀薄であった地域への急激な進出状況が特筆される。この変動の背景について、戦乱等による弥生社会の壊滅と、これに続く新来集団の定着といった解釈は考えにくい。弥

生中期末段階の集落遺跡に、広範囲な戦乱を推測させる考古学的証拠が見当たらないだけでなく、前項で確認したように、後期初頭の弥生土器型式が中期後葉から間断のない連続性を保っている。このことは、後期初頭の進出集団が中期後葉集落を営んだ集団の直接的な後裔だったことを示す。ここに見られる遺跡分布の動向とは、中期後葉の集落群が、広範囲に及ぶ何らかの影響により解体し、新たな地域への集団移動を始めたことを意味する（若狭1989ほか）。なお、かつては後期初頭の遺跡数が少ないというのが大方の認識であったが、近年の調査事例が増えたことで、遺跡数のみを比較すれば、中期後葉を凌駕するほどとなった。ただし、その大部分は小規模な集落遺跡であり、その分布も密集することなく地域内に散在する傾向を示す。この場合の集落間関係については憶測の域を出ないものの、かつて環濠集落内で居住していた複数の「世帯共同体」ともいえる個別集団が、各々の規模を維持したままで分散移住したと推測される。さらに、一定地域へ分散移住した個別集団の間には、すでにある種の協力関係や共通する目的や利害関係に基づく共同体的意識が維持されていたことも考えられよう。この分布動向が何に起因するものかは今後の検討に委ねるとても、この時に弥生集団が採った選択は、必ずしも大きなリスクを背負った賭けに近いと考える必要はないようだ。なぜならば、これ以後に見られる後期遺跡の分布状況から、分散定着した各地域において集落が順調に発展していく様相がうかがえるからである。その好例として180棟に及ぶ竪穴建物の累積数を誇る碓氷川流域の小日向地区遺跡群や、鏑川に沿った右岸段丘上のはぼ全域でみられる集落群の密集分布を挙げることができよう。これらに見る急激な集落規模の増大、すなわち人口増加現象は、個別集落独自の成長だけで達成されたのではなく、他地域から集団をも加えた再集住による新たな共同体の成立を果たしたものと理解しておきたい。

このような解釈を推し進めるならば、後期初頭における「地域再編」（若狭1989）とも評される集落動態については、その見かけ上で、解体した環濠集落から小規模集落が分裂・拡散したと理解しがちだが、結果としては中期後葉に地域内で共存していた複数の環濠集落が、新たな集村合体によって地域社会の形成に向かう過程とみるべきではないだろうか。すなわち、新たに進出した地域内では、かつての環濠集落内と同様に、各個別集団間の対立問題等を調整・制御することが可能な関係性が保たれており、それを維持するだけの共通する帰属意識がすでに醸成されていたとみるわけである。そこでは、もはや環濠で集落の内外を分離・強調する必要もなくなってしまい、地域全体でまとまった弥生社会が形成されていたとも言い得るのではないか。

ところで、このような後期初頭の地域再編の動きに加

えて、新たに形成された集落群を中心に、後期中葉の樽式2期段階から土器の地方色が顕在化することが分かれている（大木2020）。土器における地域色の成立は、弥生地域社会の長期安定化と共同体構成員の同族意識の表れと理解される。つまり、後期初頭における地域再編の動きは、その契機が外的要因であったとしても、新たな弥生地域社会の構築を目指した、意図的な第一歩だったとも評価できよう。

後期初頭の大きな変化は集落の分散・移動現象だけではなかった。中期後葉には高崎城三ノ丸遺跡のわずか一例しか知られていない方形周溝墓が、この時期に一定地域で目立って出現するのである。鈴ノ宮遺跡等で知られる高崎地域、石原田中・有馬寺畠遺跡の存在する渋川地域、そして後期初頭から新たな遺跡分布地域に加わる鏑川下流の吉井地域で、その検出例が知られる。この突然とも言ってよい方形周溝墓の普及は、ほぼ同時に起きた南関東での地域再編の動きに連動するとの見方（若狭1989）で理解可能だ。さらに、規模の大小を問わなければ、南関東からの集団移住も想定してよいのではないだろうか。少なくとも、南関東との交流は後期に入ってにわかに盛んとなった可能性が高く、後期中葉から顕在化する樽式土器に見られる土器口縁部の折返し形状も、南関東からの影響を示す一例と考えている。

南関東と結ぶ交流ルートの群馬県側玄関口ともいえる位置にある吉井地域では、後期初頭の方形周溝墓が複数の遺跡で検出されている。この地域は、鏑川と烏川の合流点付近でもあり、佐久盆地や北信地方へ向かう主要ルートの分岐点でもある。弥生後期後葉において埼玉県中西部に分布する吉ヶ谷式土器が、他に先駆けて流入し、濃密な分布を示すことは偶然ではなく、すでにそれ以前から北・中信地方と南関東とを結ぶ重要な交流ルートとして確立していたことを示すものであろう

高崎競馬場遺跡は、弥生中期後葉の環濠集落として、ほぼ全容の把握が可能な稀少例である。大正13年の競馬場開設に先立つ土木工事の際に出土した弥生土器によって既に弥生遺跡としては知られていたようである。高崎競馬場遺跡出土土器は、昭和14年の竜見町遺跡の報文（杉原・乙益1939）で紹介され、「竜見町式」の代表例として取り上げられた。遺跡の内容については、昭和40年代の建物工事の際の群馬大学による立会調査で、竪穴建物の断面らしき落ち込みが確認されていたが^{註7)}、全容の解明は平成26年に始まる正式な発掘調査の成果（群埋文2021）から始まることになる。

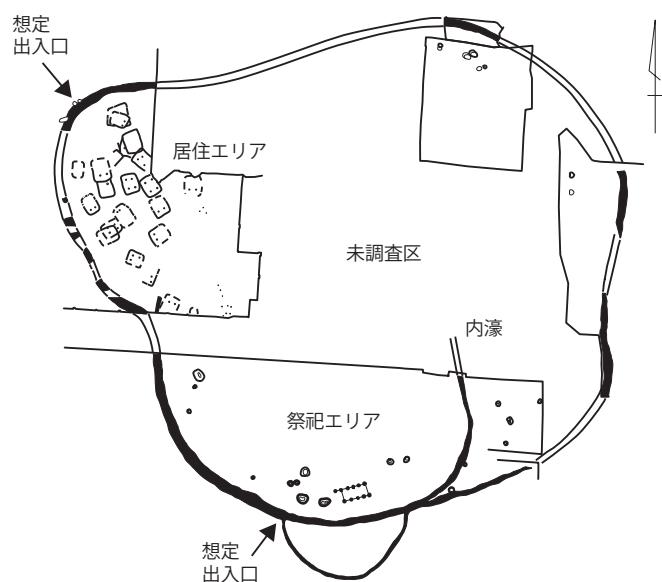
高崎競馬場遺跡の本格的な発掘調査では、環濠内で竪穴建物が密集する居住エリアと、井戸群および掘立柱建物で構成される祭祀エリアが、あらかじめ区分された集落内の地点に配置される構造で注目される（第3図）。高崎地域における弥生中期後葉の集落遺跡で記したよう

に、烏川左岸に帶状に連なって分布する同時期遺跡群から約1km強ほど東側に離れた低丘上に立地しており、その成立時期は集落形成の第3段階、そして後期初頭に入ったころを境に集落は解体する。竪穴建物の分布は環濠内に限られ、30棟ほどが検出されている。

竪穴建物の重複関係からは、3世代程度の継続期間を見込めるが、出土土器の編年的位置づけでは本稿編年の3期の中にほとんどが収まる。環濠の開削時期については、内区中央付近を東西に分かつように走る内濠が集落存続中に埋め立てられていることから、本来はこれが集落開始期当初の東側環濠であった可能性が高い。集落成立の経緯に関しては、井野川上流域の浜尻遺跡と同じく、高崎台地に先行定着していた第2段階以来の集団が複数あつまって集住形態をとり、烏川からやや離れて新たな大型集落を造ることになったと推測する。その最初の担い手となった集団が、烏川左岸に沿った遺跡群から想定できるなら、竜見町遺跡のようにやや先行して存在したと考えられる遺跡が有力候補となろう。ただし、烏川左岸上の中後期後葉集落はほとんどが編年3期段階と考えられるので、これらの集落形成はほぼ同じ頃に行われたと考えてよい。従って高崎競馬場遺跡を含むこれらの環濠集落群の形成に当たっては、高崎台地を含む榛名山東南麓地域だけでなく、外来集団を含む多くの弥生集団の参入が不可欠であったろう。

高崎競馬場遺跡の立地する高崎台地では、第2段階までに進出した遺跡数はまだ少なく、水田可耕地も未開発の部分が多くなったと考えられる。集落形成の当初から着手したと考えられる環濠の開削には、多くの労働力が必要になるはずであり、これらを先行定着していた地域内の集団だけで担うには負担が過大だったと考える。さらに、開村に要する土木労働のみならず、集落構成員を賄うだけの食糧生産を保証する水田開発が必須となり、それには相当量の労働力を必要としたはずである。このような想定に立つならば、当該地域だけでなく圏外他地域からの集団の参画は十分あり得たと思われる。各々個別集落を営んでいた複数の集団が、新たに集住して新規集落を形成する背景には、人口増や飢饉などのリスクに対応する安定した食糧生産や増産への希求、鉄器や石器あるいは木器等の物流ネットワークへの積極的関与などの有利面が想定される。一方、それまで自律的であった複数の個別集団が一緒に集住することによって生じる軋轢や利害の対立等がマイナス面として生じることが考えられる。そして、このようなマイナス面を解決するため、集落を囲い込み、構成員の結束を強化する装置として環濠が機能していた可能性をここでは考えたい。多くの弥生集落に見られる環濠の第一義的機能が「集落の防御」にあることは言うまでもないが、その場合の敵対勢力が必ずしも実体のない仮想敵でもよかったのではないか。高

崎競馬場遺跡では、焼失住居が数棟認められるものの、武器と認定できる出土遺物は極めて乏しい。環濠についても、集落内廃棄物で埋め立てた場所が数か所で見られることから、実際の防御機能が最後まで維持されたとは言い難い。このような遺構・出土遺物の様相から、現実的な戦闘態勢を維持するための施設とは思えないである。また、実際に集落同士の争いがあったと仮定して、その場合に最も守るべきものとは何であったろうか。弥生時代の一般農耕集落において最も大切な財産は、高価な財物や先端技術による道具類、あるいは貯蔵した穀物類ではなく、あらゆる生産に携わる労働力、すなわち集落構成員そのものではなかったか。労働人口の増減が集落の生産能力を直接的に左右したであろうことは容易に想像がつく。意図しない構成員人口の減少は、集落維持にとって大きな痛手となったであろう。前述したように、編年3期に見られる複数の環濠集落が、外部からの移住集団も加えた複数集団の集住によって形成されたと考えれば^(註8)、その集落内に集住する複数集団が一体化するまでには相応の時間を要したと思われる。この間に生じる集落内部の対立等によって、一部の集団が集落から離脱・逃散することの危機は、戦争と同じく可能な限り避けたい状況であったに違いない。すなわち、戦争や飢饉などの危機的状況のない平時にあっても、集住によって成立したばかりの集団内には、常に内部分裂の危機が潜んでいた可能性があると考えられ、これを制御するための様々な装置や手段が講じられたと見たい。環濠はそのための物理的装置の代表例として利用された可能性がある。さらに、集団内で催す祭祀儀礼なども、集落構成員間の結束や帰属意識の育成に有効な手段であったと考え



第3図 高崎競馬場遺跡全体図 約1/2000

られる^(註9)。このように集落環濠の意義を理解するならば、血縁紐帶を軸とする強い結束で結ばれる「世帯共同体」と呼ぶべき小規模集団では、現実の外敵が存在しない限り環濠を構える必要はなかっただろう。もっとも、小規模集団ならば環濠を開削する労働力そのものを欠くとの制約条件があつたろうことは想像がつく。

ここで、あらためて群馬県における弥生遺跡分布の動向を振り返るならば、中期中葉段階で始まった栗林集団の群馬県内への移動流入は、規模の大小はありながらも中期末まで隨時継続していたと推測される。このことは、古利根川以西の遺跡群はすでに栗林集団の文化圏に組み込まれていたことを意味しよう。後期初頭における規模の大きい集団移動の動きも、群馬県域内だけの移動で説明できるものではなく、長野県域からはもとより、方形周溝墓の急激な普及に見られるように南関東域からの集団移動も想定しておく必要がある。

前期から後期にかけて変動する弥生遺跡の分布状況を俯瞰したとき、それは決して右肩上がりの順調な発展を示すものでないことは周知の事実である。本稿でみてきたように、群馬県域では、弥生在来集団の分布圏への栗林式系集団の貫入進出に始まり、水田開拓を目途とした集落の低地域定着と拡大、そして集住集団による環濠集落形成と地域弥生社会の成立といった流れが明らかとなりつつある。そして広域に及ぶ後期初頭前後の環濠集落群解体と集団移住にみられる地域再開発の動きは、おそらく環境の激変等の広域に生じた外的要因によって惹き起こされる危機的状況に対して、弥生人たちが最終的に決断した選択肢であったのではないか。その選択に従った弥生人たちの行動の結果は、結果的には私たちの知るような後期弥生社会の発展に結びついていく。このような危機管理や成功体験を重ねていくことで、集団内の指導層が段階的に成長していくとの想定は、あながち間違ったものではあるまい。

なお、本稿をまとめるにあたり、諸々の事情から分布図等の挿図掲載を断念した。そのため、説得力の欠ける論述となってしまったのは、ひとえに筆者の力量不足によるものである。ここに改めてお許しを請いたい。

註

1. 竜見町遺跡の報告を行った杉原莊介・乙益重隆によれば、昭和10年ころに森本六爾が調査のため高崎を訪れたことが記されている(杉原・乙益1939)。この時、森本が竜見町遺跡の土器を観察したと考えがちだが、実際はそうではなかったらしい。昭和10年の森本六爾は、春に愛娘、11月には妻ミツギが病没する。森本自身も病臥の日々が続く中で衰弱した身体を引きずるように無理な転居を繰り返す悲惨な暮らしぶりであったという(小林行雄1936「ひとせの記」)。在京の愛弟子であった杉原自身も、昭和10年の暮れに森本の病床を訪れ、森本最後の論文を口述筆記でしためている。このような過酷な状況で、遺跡調査のために群馬まで出向く時間的、体力的な余裕が森本に残っていたろうか。一方、藤森栄一の回想(藤森1967『二粒の糀』)によれば、森本は昭和9年夏に藤森の案内で長野県への調査旅行を敢行している。その帰路で、高崎に寄って調査を行つたらしい。竜見町遺跡をはじめとする高崎の弥生土器に接する機会があったなら、この昭和9年の夏であった可能性が高い。ただし、この時の記録は残されておらず、調査の具体的な様子を知ることはできない。さらに、森本が竜見町出土の弥生土器を観察したかどうかも疑わしい。この土器は、現在東京国立博物館に収蔵されており、同じころに調査を行つた帝室博物館勤務の後藤守一が入手したらしい。森本の死後に出版された『弥生式土器聚成図録』(1939)では、昭和9年に長野県を訪れた際に実測したと思われる長野県荒山の壺は森本の実測だが、竜見町の土器については小林行雄の実測図が掲載されている。このことから類推すると、「竜見町式」の標式資料として知られる壺に森本は接していない可能性がある。
2. 高崎市高崎城遺跡で同類文様の壺片2点が出土している(高崎市1999)。
3. 小玉秀成氏から「陣馬式」が最も近いのではないかとのご教示を受けた。おりからの感染症対策のため、実見観察での所見を断念し写真と実測図だけでお願いせざるを得なかった。本紙面を借りて、改めて感謝とお詫びの意を表したい。
4. 高崎城遺跡1号方形周溝墓からは、横列で櫛描波状文と羽状文を描き分けた稀少例がみられる(高崎市1999)。
5. 一万田遺跡出土土器について、石田真は佐久地方編年(小山岳夫1999)のII期相当としている(石田2003)。
6. 弥生中期末から後期後半の樽3期新段階までの時間幅については、曆年代比定で紀元前後から3世紀前半頃と考えており、少なくとも200年間は見込める。この間に比定可能な資料が確認できない以上、遺跡空白期間と現時点では評価する。
7. 柿沼恵介氏より当時の立合い調査メモ等の提供と、所見についてご教示を受けた。場所は後に判明する環濠集落の北面付近で、落ち込みと思われる土層断面に炉の可能性ある焼土が見られたという。
8. 高崎競馬場遺跡の堅穴建物の炉形態には、地床炉、埋甕炉、土器敷炉、石畳み炉の4種が判明しており、各々が居住エリアの特定位置に集まる傾向が見られる。これまで群馬県内の弥生中期後葉集落では、地床炉が一般的と理解されてきた。長野県ではこの時期の土器敷炉・石畳み炉は、佐久盆地や諏訪盆地の中信地域、埋甕炉は伊那地方や松本盆地南部の南信地域での高い普及度が知られる(小山2017)。これに従えば、在来集団や北信の地床炉が過半数を占めながらも、中・南信地方からの伝統を持ち込んだ集団が集落に参入していたと解すことも可能だろう。
9. 環濠の多義性については、西川修一が簡潔にまとめている(西川2016)。

参考文献（論文）

- 相京建史 1986「清里・庚申塚遺跡について」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』pp.259-270
- 相京建史 1988「清里・庚申塚遺跡のその後—遺物を中心に—」『群馬の考古学』pp.199-218
- 青木一男 2001「中部高地型櫛描文の施文原理と地域性」『長野県考古学会誌』93・94 pp.17-30
- 安藤広道 1991「弥生時代集落群の動態」『調査研究集録』8 横浜市埋蔵文化財センター pp.133-164
- 安藤広道 1995「集落の移動から見た南関東の弥生社会」『弥生時代の集落』(2001)収録 pp.227-238
- 浅間陽 2012「群馬県における縄文晩期から弥生中期後半の集落動態」『駒澤考古』37 pp.1-14
- 飯塚卓二 1984「第V章第3節 弥生時代から古墳時代前期」『熊野堂遺跡第Ⅲ地区 雨壺遺跡』pp.323-324
- 石川日出志 2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』113 pp.57-93
- 石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100 pp.54-80
- 石川日出志 2003「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究の意義」『土曜考古』27 pp.27-53
- 石川日出志 2012「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『柳沢遺跡』pp.182-191
- 石田真 2003「第VI章 第1節 弥生土器について」『一万田遺跡』pp.134-135
- 井上唯雄・柿沼恵介 1977「入門講座 弥生土器—関東 北関東2—中期後半の弥生土器」『考古学ジャーナル』141 pp.15-22
- 井上慎也 2014「群馬県横野台地における農耕開始期の集落構造について」『法政考古学』40 pp.43-59
- 大木紳一郎 2018「群馬県東部における弥生中期後半の土器様相」『研究紀要』36 群埋文 pp.27-46
- 大木紳一郎 2020「群馬県における弥生時代後期の土器について」『研究紀要』38 群埋文 pp.31-50
- 大木紳一郎 2021「第7章3出土遺物(1)弥生時代中期後半の土器について」『高崎競馬場遺跡(1)』pp.494-505
- 柿沼恵介 1986「荒口原前原遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』pp.40-47
- 柿沼恵介 2003「第III章 3 弥生時代の高崎」『新修 高崎市史 通史編1』pp.239-336
- 神沢勇一 1966「関東地方」『日本の考古学 3 弥生文化』
- 関東弥生文化研究会 埼玉弥生土器観会 2013『シンポジウム熊谷市前中西遺跡を語る—弥生時代の大規模集落—発表要旨 資料集』
- 工楽善通 1968「北関東地方」『弥生式土器集成 本編2』pp.117-121
- 小山岳夫 1999「佐久地方の弥生土器」『99シンポジウム『長野県の弥生土器編年 発表要旨』 pp.47-57
- 小山岳夫 2017「弥生時代の炉 再々考」『長野県考古学会誌』155 pp.52-96
- 笛沢浩 1977「入門講座 弥生土器—中部 中部高地1・2—」『考古学ジャーナル』131 pp.16-23、133 pp.20-27
- 笛沢浩 1987「中部高地型の櫛描文土器」『弥生文化の研究 第4巻 弥生土器II』 pp.112-118
- 佐藤明人 1988「8考察(1)出土弥生土器について」『新保遺跡II』pp.467-489
- 設楽博己 1986「竜見町式土器をめぐって」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』pp.413-416
- 設楽博己 1991「関東地方の弥生文化」『弥生文化 日本文化の源流をさぐる』pp.196-202
- 設楽博己 2006「関東地方における弥生時代農耕集落の形成過程」『歴史民俗博物館研究報告』133 pp.109-171
- 杉原莊介・乙益重隆 1939「高崎市附近の弥生式遺跡」『考古学』10-10 合冊版10巻下pp.491-499
- 杉原莊介 1939「上野樽遺跡調査概報」『考古学』10-10 合冊本10巻下p.500-512
- 杉原莊介 1964「II各節 4繩目文土器」『日本原始美術3 弥生式土器』pp.145-149
- 鈴木正博 2014「所謂「栗林式」有文壺群の変遷-ペトリーのSD法(稠密順序の動的生成法)に学ぶ-」『熊谷市前中西遺跡を語る』考古学リーダー23 pp.99-122
- 蘭田芳雄 1969「弥生文化各説 関東」『新版考古学講座 4原史文化(上)弥生文化』pp.125-148
- 都出比呂志 1979「ムラとムラの交流」『図説 日本文化の歴史1 先史・原史』pp.153-176
- 寺沢薰 1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』p.103-162
- 直井雅尚 1991「松本平における百瀬式土器の実態」『長野県考古学会誌』63 pp.1-24
- 直井雅尚 2011「周辺から見た栗林式土器の実質と変化」『長野県考古学会誌』138・139 pp.50-66
- 西川修一 2016「環濠機能の多様性について」『魂の考古学』p.341-350
- 馬場伸一郎 2008「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』145 pp.101-174
- 馬場伸一郎 2013「弥生集落と地域社会—中部高地から—」『研究発表資料集 文化的十字路 信州』一般社団法人日本考古学協会2013年長野大会 pp.314-321
- 馬場伸一郎 2018「二軒在家原田頭遺跡と群馬県西部の弥生中期土器編年」『考古学研究』65-2 pp.92-112
- 比田井克仁 2002「関東・東北地方南部の土器」『考古資料大観2 弥生・古墳時代 土器II』pp.357-368
- 平野進一 1976「群馬県前橋市荒砥前原遺跡」『信濃』28-4 pp.83-92
- 平野進一 1986「竜見町式土器の分析について」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』pp.241-258
- 福海貴子 2003「VI-1八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡 I』pp.125-169
- 藤田典夫 2008「栃木市大塚古墳群内遺跡の弥生土器—「大塚式」土器の提唱」『地域と文化の考古学II』pp.109-122
- 宮田毅 1991・1992・2001「群馬県西長岡東山古墳群出土の弥生土器(1)(2)(3)」『利根川』12pp.61-66・13pp.59-64・22pp.71-76
- 森本六爾・小林行雄 1938「弥生式土器聚成図録」
- 八幡一郎 1932「信濃國下高井郡佐野の土器」『考古学』3-3
- 山下誠一 1999「飯田・下伊那の弥生土器」『99シンポジウム『長野県の弥生土器編年 発表要旨』』 pp.1-12
- 山内清男 1940「岡版49 解説」『日本先史土器図譜 V集 弥生式土器』
- 山本良知 1975「烏川流域における弥生文化」『倉渕村誌』別冊 水沼遺跡 pp.105-136
- 若狭徹 1989「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態」『群馬文化』220 P.55-70
- 若狭徹 1996「群馬県地域」『YAY!』弥生土器を語る会 pp.223-234
- 若狭徹 2001a「第2章 第2節 進展した山麓の開発」『群馬町誌 通史編上』pp.41-59
- 若狭徹 2001b「安中市における弥生時代の概観」『安中市史』第4巻 pp.315-356
- 若狭徹 2003「第3章弥生時代」『安中市史』第2巻通史編 pp.85-108

参考文献（報告書）

- 安中市教育委員会 1987『注連引原遺跡』
- 安中市教育委員会 1988『注連引原II遺跡』
- 安中市教育委員会 1995『荒神平・吹上遺跡』
- 安中市教育委員会 2004『中野谷地区遺跡群2』
- 安中市遺跡調査団 2006『杉名葉師遺跡』
- 安中市教育委員会 2010『小日向地区遺跡群』
- 安中市教育委員会 2010『国衙下辻遺跡』
- 安中市教育委員会 2014『国衙下辻II遺跡』

安中市教育委員会 2014『西横野東部地区遺跡群』
 伊勢崎市教育委員会 1983『西太田遺跡』
 太田市教育委員会 1991「西長岡東山古墳群第III次A区」『埋蔵文化財発掘調査年報I』
 粕川村教育委員会 1990『西迎遺跡』
 川場村教育委員会 2017『生品小鳥沢遺跡』
 群馬県教育委員会 1984『昭和59年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報 頭無遺跡 大久保遺跡 川籠皆戸遺跡』
 群馬県立博物館 1963『笛遺跡』
 群馬県立博物館 1966『笛遺跡(遺物編)』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982『十二原遺跡 大原遺跡 前中原遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984・1990『熊野堂遺跡(1)(2)』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984『熊野堂遺跡 第III地区 雨壺遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985『荒砥前原遺跡 赤石城址』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985『上並榎南遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『三後沢遺跡 十二原II遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『新保遺跡I 弥生・古墳時代大溝編』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988『新保遺跡II 弥生・古墳時代集落編』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989『有馬条里遺跡I』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990・1992・1993・1994『新保田中村前遺跡I・II・III・IV』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991『荒砥北三木堂遺跡I』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992『内匠諫訪前遺跡 内匠日影周地遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992・1997『南蛇井増光寺遺跡I・V・VI』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『神保富士塚遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『白倉下原・天引向原遺跡III』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『下高瀬上之原遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995『中高瀬觀音山遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996『天引孤崎遺跡II』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996『阿久津宮内遺跡 大館馬場遺跡 安養寺森西遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『神保植松遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『長根安坪遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『櫛島川端遺跡 公田東遺跡 公田池尻遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『徳丸仲田遺跡(2)』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『成塚向山古墳群』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『西野原遺跡(5)(7)』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『八ヶ入遺跡II』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『西長岡宿遺跡(1)』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015『新田上遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015『引切塚遺跡 青柳宿上遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2018『金井東裏遺跡 <近世・弥生・繩文時代編>』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2019『林中原II遺跡(3)』
 山武考古学研究所 1999『八木連西久保遺跡 行沢大竹遺跡 行沢竹松遺跡 諸戸スサキ遺跡』
 渋川市教育委員会 1986『中村遺跡』
 渋川市教育委員会 1988『有馬庵寺跡』
 渋川市教育委員会 1997『田中遺跡』
 昭和村教育委員会 1993『川額原II遺跡』
 昭和村教育委員会 1996『川額原I遺跡』
 白沢村教育委員会 1980『寺谷遺跡発掘調査報告(図版編)』
 白沢村教育委員会 2003『寺谷II遺跡』
 高崎市 1999『新編 高崎市史 資料編1 原始古代1』
 高崎市教育委員会 1978『鉈ノ宮遺跡』
 高崎市教育委員会 1979『引間遺跡』
 高崎市教育委員会 1981『浜尻遺跡』

高崎市教育委員会 1990『西島相ノ沢遺跡』
 高崎市教育委員会 1990『高崎城遺跡III・IV・V』
 高崎市教育委員会 1992『高闘坂村遺跡』
 高崎市教育委員会 1993『高闘村前遺跡』
 高崎市教育委員会 1994『高崎城VII 高崎城三ノ丸遺跡』
 高崎市教育委員会 1995『高闘村前II遺跡・高闘東沖・村前遺跡』
 高崎市教育委員会 2014『下里見宮谷戸遺跡3 権田闘谷遺跡 金古町裏遺跡 小八木宅地添遺跡2 飯玉遺跡3 南大類南遺跡2』
 高崎市教育委員会 2019『下里見宮谷戸遺跡4』
 高崎市遺跡調査会 1992『稻荷町I遺跡』
 高崎市遺跡調査会 1997『高崎情報団地遺跡』
 高崎市遺跡調査会 1997『引間V遺跡』
 玉村町教育委員会 2003『一万田遺跡』
 月夜野町教育委員会 2002『十二原地区遺跡群』
 富岡市教育委員会 1987『小塙・六反田・久保田遺跡発掘調査報告書』
 富岡市教育委員会 1993『中高瀬觀音山遺跡 範囲確認調査報告書』
 富岡市教育委員会 1994『一ノ宮押出遺跡発掘調査報告書』
 富岡市教育委員会 1994『七日市觀音前遺跡』
 富岡市教育委員会 1997『東八木 阿曾岡・権現堂遺跡』
 富岡市教育委員会 2001『黒川小塙遺跡III』
 富岡市教育委員会 2008『黒川小塙遺跡IV』
 富岡市教育委員会 2013『宇田恵下原遺跡』
 みなかみ町教育委員会 2009『觀音堂遺跡』
 妙義町教育委員会 1990『古立東山遺跡 古立中村遺跡 八木連狸沢遺跡 八木連荒畠遺跡』
 吉井町教育委員会 1982『川内遺跡一図版編一』
 吉井町教育委員会 2003・2004・2005『長根遺跡群発掘調査報告書VI・VII・IX・X』

掲載図引用文献

新井遺跡 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2022 b『新井遺跡』
 有笠山遺跡 群馬県 1986『群馬県史 資料編2 原始古代2』
 有馬寺畠遺跡 渋川市教育委員会 2014『有馬寺畠遺跡』
 大八木伊勢廻遺跡 高崎市教育委員会 2010『大八木・伊勢廻遺跡2』
 金井下新田遺跡 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021『金井下新田遺跡 <縄文時代・弥生時代編>』
 上高田社宮子原遺跡 富岡市教育委員会 2014『上高田社宮子原遺跡 I 松義中部地区遺跡群II』
 清里・庚申塚遺跡 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982『清里・庚申塚遺跡』
 熊野堂遺跡 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984『熊野堂遺跡(1)』
 黒川小塙遺跡 富岡市教育委員会 2008『黒川小塙遺跡IV』
 下高田白山遺跡 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2022a『下高田白山遺跡 下高田稻荷谷II遺跡 向原IV遺跡』
 高崎競馬場遺跡 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021『高崎競馬場遺跡(1)』
 長谷津遺跡 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『長谷津遺跡』
 二軒在家原田頭遺跡 安中市教育委員会 2017『西横野中部地区遺跡群 二軒在家原田頭遺跡 行田二本杉原東遺跡』
 浜尻A遺跡 群馬県 1986『群馬県史 資料編2 原始古代2』
 林製作所遺跡 群馬県 1986『群馬県史 資料編2 原始古代2』
 東八木遺跡 富岡市教育委員会 1997『東八木 阿曾岡・権現堂遺跡』